

ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における
はてしなさについて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000461

ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における はてしなさについて

小 林 良 孝

Michael Ende 著 »Die unendliche Geschichte« (Thienemann Verlag 1979) は、428 ページの大作である。この作品の日本語訳 上田真而子／佐藤真理子訳 『はてしない物語』(岩波書店 1982 年) は、589 ページのずっしりと重い分厚い本である。エンデのこの部類の作品は Märchen-Roman と呼ばれている。童話 (Märchen) ではあるけれども、ありきたりの童話と異なって長編 (Roman) なのである。つまり、『はてしない物語』は名実ともに長編童話なのである。童話ではあっても大人が読んで不都合はない。実際、エンデの作品には、大人の愛読者も多い。しかしやはり、主たる読者層は子供たちであろう。

ところで、この »Die unendliche Geschichte«、あるいはこれの和訳の『はてしない物語』を読み始めた人は、その人がドイツ人であれ日本人であれ、あるいはその人が大人であれ子供であれ、はたして全員がこの物語の最後の 1 行まで読み通すであろうか。いや、とてもそうとは思えない。この物語の途中のどこかまでは読みはしたけれども、その後はまだ読んでいないままになっている場合もあり得るであろう。とすれば、その場合は、その読者の主観はいざ知らず、客観的にはこの物語はまだ読まれていないのである。物語はまだその後も続いているのだから、終っていない状態のままであり続けるのである。この場合は、この意味で、この物語ははてしない物語であり続けるのである。しかし、こんなことは、この »Die unendliche Geschichte« 『はてしない物語』に限ったことではない。どの本についてだって起こり得ることである。それよりも何よりも、こんな意味のはてしなさを論じる？ことは、実に愚劣だ、何の価値もない。ひとまずその通りであるとしておこう。ただ、この長編を最後の 1 行まで読むことは、誰にとってもかなり骨がおれることであろう。

こんな空想は捨てて、この »Die unendliche Geschichte«、『はてしない物語』の最後の 1 行まで読んだことにしよう。ところがこの物語は、次の言葉で終わっているのである。

Aber das ist eine andere Geschichte und soll ein andermal erzählt werden.⁽¹⁾

しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。

せっかく最後の1行まで読んでも、この『はてしない物語』はやはり話は終わっていないのである。この続きはどういう具合に続けられていくのか、どんな内容の続きがあるのか、ここではつまびらかにはされていない。しかしとにかく、この物語にはまだ必然的に別の続きの話があると、宣告されているのである。つまり、この物語は最後まで読んでもやはり文字どおりはてしない物語だったのである。

しかもこの「これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。」という預言めいた文言は、この物語の最後に1回だけ宣告されているのではなく、途中で語られている多くの物語に関連して、実は既に10回以上も繰り返されてきた言葉なのである。

Ⅲ.「太古の沼ガメ モルラ」の章では、

さてこの老カイロンはけっしてエルフェンバイン塔にはもどってはこなかった。とはいえ彼は死んだのでも、草海原の緑の肌族のところにとどまっていたのでもなかった。彼の運命は、彼を全然予期せぬ全く別の道へ導いていったのである。しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽²⁾ 実例1
また、XV.「色とりどりの死グラオーグラマーン」の章では、

「さようなら、グラオーグラマーン、いろいろありがとうね！」と、彼はそっと言った。

「僕は帰って来るからね、きっと、きっと、帰って来るからね。」

そして彼は、扉の隙間をスルッとすりぬけた。そうするとその扉は彼の後ろですぐにゆっくりと閉まり始めた。

バスチアンは、彼のこの約束は守られることはないことを知らなかった。ずうーっと、ずうーっと後に、彼の委託を受けて彼に代ってこの約束を守ってくれる人が居るのだけれども…。

しかし、これはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽³⁾ 実例2
また、XVII.「勇士ヒンレックのための竜」の章では、

彼らが披露した物語や歌は、手に汗を握るようなものや、愉快なものや、悲しいものや、いろいろあった。しかしそれらをひとつ一つ披露すること

は、ここではとてもできない。それらはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁴⁾ 実例 3

また同じく、「勇士ヒンレックのための竜」の章の中では、

ところで勇士ヒンレックはといえば、彼は首尾よく冷たい炎の国モルグルにたどりつき、化石化した森ヴォッドガバイにわけ入って、ラーガー城のまわりにめぐらされていた三つの堀を渡ることもできた。鉛の斧を見つけ出し、竜スメルクを討ちとり、オグラマール姫を救い出し、彼女の父王のもとへ連れ帰った。姫は彼と結婚したいという気になっていたのだが、今度は彼の方にその気がなくなっていた。しかしこれはまた別の語、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁵⁾ 実例 4

また、XXI.「星僧院」の章では、

バスチアンは、イハがとぼとぼ離れて行く後ろ姿を長い間見送っていた。イハを追いやったことを思うと心から喜ぶ気にはなれなかった。彼は自分の豪華なテントの中へ入って、柔らかいクッションの上に身を横たえ、天井を見つめていた。何回も何回も、イハの最大の願いをかなえてやったのだと、自分に言い聞かせた。しかし、自分にそう言い聞かせても陰うつな気分は晴れなかった。誰かが誰かのためを思っでするにしても、そのタイミングと理由が大切なのだ。

しかしそれはバスチアンにだけ言えること、イハのほうは本当に翼のある白い雄馬を見つけ、そしてその馬と結婚した。そして後に息子を産んだ。その息子は翼のある白いラバで、パタプランと名づけられた。彼はファンタージェンの国で、おおいに評判になった。しかしこれはまた別の物語、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁶⁾ 実例 5

また、同じくXXI.「星僧院」の章の中では、

ところで、この夜、星僧院ギーガムではこの三人の沈思黙考師の間で初めて決定的な意見の相違が生じ、その何年か後にはついに兄弟関係を解消し、予感の母ウシュトゥ、観照の父シルクリー、伶俐の息子イーギブは各々自分の僧院を建立した。しかしこれはまた別の物語、これはいつかまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁷⁾ 実例 6

XXIII.「昔帝王たちの都」の章では、

ビヤクシンの茂みの中にはピカピカ光る物がとり残されていた。それはバスチアンが無くしたゲマルの帯だった。バスチアンは、それを無くしたことに気づかず、その後もずうっとその帯のことは全然考えなかった。そ

の帯はイルリアンがせっかく炎の中から救い出したものだったのだが、それは無駄に終わったわけだ。

その2、3日後、そのゲマルはカササギに発見された。そのカササギはこのピカピカ光る物がどんな働きのあるものかつゆ知らず、それを巣に持ち帰った。はたせるかなこのことによってまた別の物語が始まるのだが、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁸⁾ …………… 実例7
同じく、XXIII.「昔帝王たちの都」の章の中には、

「シカンダ！」と、バスチアンは吹きすさぶ嵐の中でそっと言った。「おまえとはこれで永遠のお別れだ。友に向っておまえを引き抜く者によって二度とふたたび禍がもたらされてはならぬのだ。僕とおまえに起きたことがことごとく忘れ去られるまでは、誰一人おまえをここで発見することがあつてはならぬのだ。」

それから彼はその穴を埋めもどして、最後にその上に苔や小枝を置いた。誰にもそれが見つけ出されることがないように。

シカンダは今もまだそこにある。遠い遠い未来に、危険なくそれに触れることが許される者が来るであろう。——しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽⁹⁾ …………… 実例8
また、XXIV.「アイウオーラおばさま」の章の中では、

…三人（ヒスバルト、ヒドルン、ヒクリオン）は、バスチアンに誓った忠誠の誓いを破る気にはなれなかったので、ファンタージェンの国じゅう彼を探しまわることに決めた。しかし、どの方向へ進むべきかについては意見が一致することができなかったので、それぞれ自分の決断で進むことにした。そして三人とも数々の冒険に出会った。結局は無駄に終わった彼らのこの探索についての報告は、ファンタージェンの国には数々ある。しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽¹⁰⁾ …………… 実例9

と書かれているのである。そして、この『はてしない物語』の最後も、上に引用した9個の実例と全く同じ文でしめくくられているのである。

コレアンダーさんは彼を店の入口のドアのところまで送ってきた。そのガラスのドアの方へ近づいて行くと、彼のお父さんが道路の向こう側に立って、彼を待っていた。その姿が、ガラスドアの上の、裏側から見える文字と文字の間のむこうに見えた。お父さんの顔は輝きそのものだった。

バスチアンは勢いよくそのドアを開けた。ドアにとりつけてある真鍮の

呼びリンが激しく鳴りはじめた。バスチアンはその輝きに向かって駆けて行った。

コレアンダーさんはドアをそうっと閉め、その二人の後ろ姿を見送った。

「バスチアン・バルタザール・ブックス」、彼はつぶやいた。「もし私が間違っていなければ、おまえはまだたくさんの人々にファンタージェンへ行く道を教えてあげることだろう、その人が私たちに生命の水を持ってきてくれるようにね。」

コレアンダーさんは間違っていなかった。しかしこれはまた別の物語、これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。⁽¹¹⁾……… 実例 10

これら 10 個の実例に共通しているのは「これはまた別の物語」という言葉と、「これはまた別の時に語られることになるであろう」という言葉である。

では、「これはまた別の物語」という言葉で何が意味されているのか。この言葉によって、これらいずれの物語においても、その物語の主人公の不滅とその主人公にまつわる物語の新展開が約束されているのである。例えば第 1 例においては、老カイローンは、ここで命がはてるのではない。この後も生きのびて、新しい物語を展開して行くことが約束されているのである。第 2 番目にあげた実例においても事態は同じである。主人公である色とりどりの死グラオーグラマーンはここで消滅するのではない。更に存在し続けて、彼にまつわる新しい物語の新たな展開が約束されているのである。このことは上に引用したすべての実例において共通していることである。はてしなく続いて行くのは、主体の持続性とその主体にまつわる物語の更新性ないしは創造的進展である。

「これはまたいつか別の時に語られることになるであろう。」この言葉は、この新たな物語が、実際に人に語られることになることを予言したものである。では、誰によって語られることになるのだろうか。エンデは、第一にはこの本の読者ひとり一人によって語られることを期待しているのである。つまり、その新たな物語が、単に読者の頭の中の観念の集積に終るのではなく、読者によって実際に語られることによって、客観的な存在の中へ置きかえられることになるであろうと、予言しているのである。つまり、観念が読者によって客観的に存在化されることを期待をこめて予言したものである。

ここでひとまず結論を出せば、この『はてしない物語』のはてしなさの本質は、持続性と創造性、すなわち創造的持続性にある。では、この創造的持続性

は、この物語の中で、いかなる形で実現されているのであろうか。この持続と創造の運動には、全然定まった方向性がないのであろうか。あるいは、一定の方向性があるのであろうか、あるいは何らかの一定の型があるものであろうか。この疑問に対する答を、雑多な物語の集積である »Die unendliche Geschichte« 『はてしない物語』の中から探し出すことにしよう。

三次元的楕円環運動

もし表紙がその本の内容を裏切っていないとすれば、その本を開いて読まなくても、その本の表紙を見るだけで、その本の内容に関する正しい情報が得られるはずである。それ故、この本を開いて読み始める前に、まずはこの本の表紙を観察することにしよう。

念のために断っておくが、今、手にしてながめている本は、1979年に Thienemann 社から出版されたこの本の初版本である。サイズはA 5版の普通の縦長の本である。おもて表紙も背もうら表紙も全く同じ色、少し暗い感じの赤、である。何の意図もなく表紙の色を決めたはずはない。エンデ自身が決めたものか否かは知らないけれども、表紙のデザインもエンデ自身が決定したものとして考察することにする。つまり、表紙のこの色、少し暗い感じの赤もエンデが決めたものとする。エンデがルドルフ・シュタイナーの思想に精通していたことは、自他共に認めていることである。⁽¹²⁾エンデ自身が赤という色について直接話しているところを筆者は知らないので、R. シュタイナーの所説によって、赤という色の意味を探ってみることにしよう。

黄は外へ輝き、青は内へ輝き…、そして赤は両者を中和して一様に輝きます。⁽¹³⁾

赤は、離心運動と求心運動とが完全に均衡している運動、すなわち完全な円または完全な円周運動を意味しているのである。しかし、この表紙の赤は原色ではなく、少し暗い感じの赤である。この点を考慮に入れば、この表紙の色は不完全な円または不完全な円周運動を意味していることになる。

たいして注意もせず、ただサッと見ただけでは、あるいは見る角度がたまたま悪ければ、この赤い表紙には何も書いていないように見える。角度を変えながらよく見れば、図と文字が見えてくる。手に取って見ると、この本の表紙は、紙表紙ではなく、堅い厚紙に赤い布を張り合わせたしっかりしたものなのである。この表紙の上の図や文字は、描かれたものではなく刻印されたものである。従って、目で見るとよりは手でさすってみれば、デコボコする感じでそれがある

ことはよりよくわかる。

まず、刻印されている図は、横幅 11cm 弱、縦 12cm 程の大きさの少し縦長の長方形である。更にこの長方形の真中には横幅が 9 cm 弱、縦が 11cm 程の楕円形が刻印されている。更にこの楕円形の図の中には、»Die unendliche Geschichte« という書題が浮き出す形で刻印されている。

これらの図をもう少し詳しく見て見よう。まずは外枠を形成している正方形に近い長方形。これは中央から右半分と左半分に分けられていて、右半分は見る方向をくふうすると少し明るく輝くようになっている。しかし、左半分はこの本の表紙全体の色と同じ色、輝きのない少し暗い感じの赤である。この明と暗からごく自然に連想することは、昼と夜である。地球上のあらゆるものは、昼の営みから夜の営みへ、夜の営みから昼の営みへと循環する。あるいは、昼は夜となり、夜は昼となる。これの反復である。いずれにせよ、明と暗の領域・世界が、この横幅 11cm 弱、縦幅 12cm 程の長方形の中におさまっているのである。

この長方形の図案が何を意味しているのかは、この本を開いてこの物語を読んで行けば具体的に明確になるはずである。しかしこの本を開いて読むのは、もう少し後のお楽しみとして、今はこの本以外の所でこの図案の意味を解明する手掛かりとなると思われるエンデ自身の言葉を探してみることにしよう。

エンデは、井上ひさし氏との対談の中で次のように言っている。

エンデ …ヨーロッパには知ることと信じることを分けるという宿命的、伝統的二分法がありますが、真の現代人は、ちょうど自然科学と同じ明晰さで超感覚的世界も見ることができて、初めて納得する。そうした意味で、先の二分法に根ざす古い宗教的信仰と自然科学的方法とは、どちらも克服されるべき時代に来ています。⁽¹⁴⁾

エンデのこの言葉を今眺めている表紙の長方形の図に当てはめれば、長方形の内部を二分している明の部分と暗の部分は、どちらがどれに当たるかは別として、いずれか一方は宗教的信仰に対応し、他方は自然科学に対応しているということになる。この二分法は克服されるべきである、というのがエンデの主張である。同じ主旨のことは、エンデと安野光雅氏との対談の中でも述べられている。

エンデ …西洋の犯した根本的な誤りは、神を光で、悪魔を闇で表したことです。色だって、闇なくしては生まれ得ないのだし、光だけで成り立つ世界は、全く闇の世界と同じように、何も見ることはできません。古代アジアの数学では、一こそが最大の数でした。二は、数としてはむしろ小

さくなる。すべての対立をより大きな全体性のなかに包括する、見える世界、見えない世界、すべてを包括する一体性としての一。もともとはこの一体性こそを、神と呼んだのです。⁽¹⁵⁾

これを再び表紙の長方形の図に当てはめれば、長方形の内部の明の部分は光・神に相当し、暗の部分は闇・悪魔に相当することになる。あるいは、明の部分は見える世界に、暗の部分は見えない世界に相当することになる。そして、この安野光雅氏との対談の中でも、この二分法は西洋の犯した根本的な誤りである、と主張されているのである。

これら二つの対談を参考にして、この表紙の長方形の図を考察すれば、エンデのこの本の著作の目標は、一つのものを明と暗の二つの部分に分けることにあったのではなく、明と暗が本当は何を意味しているのかは今のところはまだ明らかにはなっていないにしても、この明と暗の二つのものを一つのものに、全一のものに統合することにあったと見るべきであろう。

この長方形の図についての観察は、ひとまずこれくらいにして、この横幅約11cm、縦約12cmの長方形の刻印の真中にある楕円形の図の考察へ話を進めよう。この楕円はこの外側の上に考察した長方形とちがって、線によって形成されているのではなく、幅7～8mm程の帯紐によって形成されている。この帯紐の上には何かが刻印されている、ないしはこの帯紐は何かから成り立っているが、これについてはもう少し後にふれることにする。この楕円は左右の短径が最大部分で約8.5mm、上下の長径が最大部分で約11cm、その外側の長方形の辺と接している所は一箇所もない。つまりこの楕円形状のものは、外側の長方形の中にすっぽりとおさまった楕円形のドーナツのようなものである。

今重要なのは、このドーナツのようなものの形状が楕円であるということである。円は一つの定点（中心点）からの距離が常に一定である点の軌跡である。これに対して楕円は、二つの定点（中心点）からの距離の和が常に一定である点の軌跡である。すなわち、楕円は二つの中心を持つ円なのである。円は一元論的世界を表し、円周は一元論的運動を表す。これに対して楕円は、二元論的世界を表し、楕円周は二元論的運動を表す。

では、この本の表紙に刻印されている楕円の二つの中心とは何であろうか。この楕円を包摂している長方形が上に考察したように、明の領域と暗の領域から成り立っていることを考慮に入れば、この楕円の一つの中心は明、もう一つの中心は暗と考えるべきである。そうすれば、この楕円は、明・暗二元論によって成り立っている世界を表し、この楕円周は明・暗二元によって繰りひろ

げられる無限（きれ目のない）運動を表している。

既に引用した対談の中でエンデ自身が述べていたように、二元論的世界は克服されるべき世界であり、一元論的世界こそは実現されるべきユートピア的世界である。

楕円は不完全な円である。本稿 190 ページに指摘しておいたように、この本の表紙の色、原色でない赤、少し暗い感じの赤は、不完全な円を示唆している。不完全な円とは、可能性としてはいろいろな形の円があり得るけれども、この本の表紙の中では、この楕円しかない。すなわち、この本の表紙の色は楕円を意味しているのである。それ故、この色は、明・暗——これが何を意味しているかは後に明らかになる——二元論によって繰りひろげられる世界を意味しているのである。

次に、この楕円の内部に目を向けてみよう。この部分には、»Die unendliche Geschichte« というこの本の標題が刻印されている。つまり、»Die unendliche Geschichte« は、明・暗二元論によって形成される世界の中におさめられているのである。つまり、»Die unendliche Geschichte« の形状は楕円形であり、その外延は二つの中心、明と暗からの距離の和が常に一定な点の軌跡上を移動することになる。それ故、『はてしない物語』のはてしなさは、一つには楕円周をはてしなくたどるはてしなさであるはずである。それ故、この楕円運動に持続性と創造性が託されているはずである。

更に注意すべきことは、この楕円は平面に描かれているものではなく、刻印されたものであるということだ。平面に描かれただけの楕円は、平面は縦・横二次元であるから、その楕円も縦・横二次元の楕円となる。二次元的楕円周運動は全く同じ線を無限にたどるだけとなる。これでは無限性は表現され得るけれども、新局面・変化・創造性は表現され得ない。それ故、この二次元的楕円周上の循環は「悪魔の環」と呼ばれている。悪魔の環はあってはならない環、克服されるべき環なのである。それ故、『はてしない物語』の楕円は二次元であってはならないのである。

この本の表紙の楕円は描かれているのではなく、刻印された楕円である。刻印されているわけだから、縦・横の広がりがあるだけではなく凸（高）・凹（低）がある。真上から見れば楕円形という形しか見えないけれども、ななめ横から見れば高低が見える、つまりこの楕円は立体的楕円・三次元的楕円になっているのである。この高さは理論的には層に分割することができるのである。さすがに、手で触って、あるいは目で見て、明瞭に複数の層であることがわかるよ

うにはなっていないけれども、我々はこの高低の中に層構造を読み取るべきなのである。そうすれば、この表紙の上にのせられている楕円は、螺旋形の楕円、すなわち楕円形の螺旋状のバネのような重層的なものとなるはずである。これによって始めて、運動の無限性（はてしなさ）と新局面への進展（創造性）が同時に可能となる。はてしない創造性が実現されるためには、この楕円の中の「Die unendliche Geschichte」というこの本の標題自体が三次元化されていなければならない。実際、この標題を表す文字は凸状になっている。

次は、この楕円を形づくっている幅7～8mmの帯紐状の部分の考察に移ろう。この帯紐は、2匹の蛇から成り立っている。この楕円の右半分を形成している蛇は、尾を真上にし頭を真下にして、背を外側の明の領域に向け、腹を楕円の中心方向へ向けている。つまり、この右側の蛇は明の原理を表している蛇である。他方、この楕円の左半分を形成している蛇は、尾を真下にし頭を真上にして、背を外側の暗の領域に向け、腹を楕円の中心方向に向いている。つまり、この左側の蛇は暗の原理を表している蛇である。そして、右側の明の原理の蛇はこの楕円の一番下の所で左側の暗の原理の蛇の尾をくわえ、左側の暗の原理の蛇はこの楕円の一番上の所で右側の明の原理の蛇の尾をくわえている。こうして、明の原理の蛇と暗の原理の蛇は、互いに相手の尾をくわえ合う形で切れ目のない楕円形の輪を形づくり、その輪の中に「Die unendliche Geschichte」を閉じ込めているのである。明の原理の蛇と暗の原理の蛇が相互に相手の尾をくわえ合い呑み込み合うことによって、明の原理と暗の原理の相互嵌入・相互取り込みが実現されているのである。

次に、この2匹の蛇の頭の方に注意しよう。わかりやすいように、この楕円を時計の文字板と見なしてみよう。まずこの楕円の右半分を形成している明の原理の蛇を見てみよう。この蛇の尾は一番上の12時に位置し、頭が一番下の6時に位置している。つまり、この右側の蛇は零時から6時方向へ向かって進む姿勢を取っている。左側の蛇も進む方向は同じである。尾が一番下の6時の所にあつて、頭が一番上の12時の所にある。つまり、明の原理の蛇と暗の原理の蛇とがつながって、時計を零時から12時までひと廻りする形状になっている。つまり、この2匹の蛇によって時計方向の動き、右まわりの動き、順の動きが示されている。

では、エンデはこの順の動きによって何を示唆しているのであろうか。この意味はこの『はてしない物語』を開いて中を読めばわかるはずであるが、今はこの本の表紙の謎ときをしている段階であるから、開いて読むわけにはいかな

い。それ故、この本以外のどこかにヒントがあるか、探すことにしよう。ヒントはある。それは『モモ』の中の、モモとマイスター・ホラの次の会話である。

「それで、もし私の心臓が鼓動を打つのをやめたら？」と、モモはたずねた。

「その時はね、」と、マイスター・ホラは答えた。「おまえの時間も止まるのだよ。こういうふうに言うこともできるだろうね。その時は、おまえは自分自身で、おまえのすべての昼夜を、おまえのすべての歳月の時間を通りぬけてさかのぼって行くのだよ。つまり、おまえの一生涯を逆方向にたどって行くことになるのだよ、…」⁽¹⁶⁾

つまり、人は死ねば時間を逆方向に、すなわち時計を逆まわり・左まわりにさかのぼって行くことになる、というのがエンデの思想なのである。そうすれば、この『はてしない物語』の蛇によって示されている右まわり・順方向のまわり方は、死の逆方向すなわち生を意味しているはずである。明の原理の蛇も暗の原理の蛇も共に生を意味しているはずである。ただし、全く対照的な原理によって営まれる生の循環を意味しているはずである。つまり、この「Die unendliche Geschichte」は、完全に生の世界の中の物語になるはずである。

では次に、何故蛇がこの物語の表紙に配置されているのであろうか。いったいこの蛇はどういう蛇なのだろうか。旧約聖書の創世期3に登場する蛇と何か関係はあるのだろうか。それともギリシア神話の中に登場してくる数々の蛇のいずれかと何か関係はあるのだろうか。あるいはまたこの蛇は、全く別の世界の蛇と関係しているのであろうか。なにしろ蛇は、世界中の伝説や神話の中で非常に頻繁に登場してきて、いずれの世界においても非常に重要な役割をはたしているものなのである。この表紙のデザインを見ているだけでは、確定はむずかしい。とはいえ、この表紙のデザインで絵柄っぽいのはこの蛇だけである。あとは長方形を形成している直線と、楕円を形成している曲線だけである。この蛇は、この本の内容と密接な関係があるにちがいない。そういえば、エンデは、『オリーブの森で語りあう』という本の中で次のように語っている。

エンデ …『はてしない物語』というのは、昔ながらの意味での教養小説で、そこでは心の成長というのが描かれている。だから産業社会やテクノロジーなどの問題とはいっさい関係ないんだ。…なにしろバスチアンにとっては、まったく個人的なオデュッセイアが問題なんだから。」⁽¹⁷⁾

また、更に次のようにも言っている。

エンデ …オデュッセウスはオデュッセイアの中にしか存在できず、ヨー

ゼフ・Kはカフカの宇宙のなかにしか存在できない。どんな芸術の世界も自律しているので、現実の生活に直接あてはめるわけにはいかない。これらの物語が本のおもて表紙と裏表紙のあいだに成立しているということも、また結構なことなんだ。想像力の魔術的な領域こそ、『はてしない物語』のファンタージェン国なわけで、ぼくたちはときどきそこへ旅して、見者となるんだ。それからぼくたちは、外的現実にもどることができる。変化した意識をおみやげにしてね。そしてこの外的現実を変化させる、あるいはすくなくとも外的現実を新しい角度から見て体験することができる。ファンタージェン国で手に入れたものを、バスチアンは、この想像の国の境界をこえて現実の国に、なにひとつ持ち帰ることはできない。2匹の蛇がその見張りをしている。バスチアンはなにひとつ持ち帰れない。バスチアンじしんは別だけど。生命の水だってこぼしてしまうのだが、それでもバスチアンはお父さんにそれをもって帰ることができる。バスチアンじしんをとおしてね。⁽¹⁸⁾

エンデは、『はてしない物語』をホメロスの『オデュッセイア』に見たて、バスチアンをオデュッセウスに見たてている。バスチアンのファンタージェン国の旅をオデュッセウスの地中海を経巡る帰郷の旅に見たてているのである。しかし、『イーリアス』とこれに続く『オデュッセイア』の中にはアカイア軍側の英雄ピロクテテースを咬んだ毒蛇以外、重要な意味を持つ蛇は登場しない。しかし、ピロクテテースに咬みついた毒蛇は、この『はてしない物語』の話の筋にはふさわしくなさそうである。それでは蛇探索の領域をギリシア神話の世界まで広げて見てはどうだろう。そうすれば、蛇はうじゃうじゃいる。

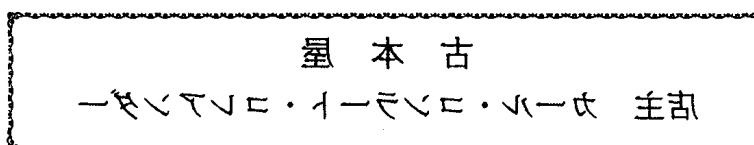
ファンタージェン国の蛇は、生命の水を守っている蛇だという。生命の水を守る蛇＝生命を守る蛇＝生命を病から守る蛇＝生命を病から癒す蛇。そうだ！この蛇は医神アスクレーピオスの神獣としての蛇だ！とすれば、この2匹の蛇にとり囲まれているこの「Die unendliche Geschichte」は癒しの物語であるはずである。しかし、この推理が正しいか否かは、この図柄だけでは決定できない。それは、実際にこの物語を読んでみなければわからない。

この本の表紙の観察の最後に、もう一度、いちばん外側の横幅11cm弱、縦12cm強の長方形に目を向けてみよう。筆者にとってはこれはこの物語への入口のように見えてならないのである。右の明の部分の扉と左の暗の部分の扉が中央で合わさっている観音開きの入口のように見えるのである。ただし、右の扉と左の扉の合わせ目は中央上下一真線ではない。「Die unendliche Geschichte」と

いう標題を真中にとり込んでいる2匹の蛇によって形づくられている楕円形の部分は右側の明るく輝く扉と一体構造になっていて、この楕円の左半分は左の暗の扉の中腹へ張り出している構造になっているのである。だから、この扉を開けても、この楕円形の部分が真中から左右に割れることは絶対にないし、»Die unendliche Geschichte« という標題もその真中から左右に割れることも絶対にない構造になっているのである。さあそれでは、この入口の真正面に立って、その真中の unendliche(はてしない)という文字のあたりに両手をあてて、グイッと押してみましょう。あっ、開きました !!! さあ、この »Die unendliche Geschichte« の中へ入ってみましょう。

この手のこんだ表紙のデザインによって、本当は何が意味されているのかを解明するために、まず初めにこの物語を次の四つの場面に分けて、内容を明確におさえておかなければなりません。

第1場



この本の本文の第1ページの冒頭には、章立てもなく、上記のように、商標がガラス戸の裏側から見える形で、すなわち鏡像の形で書かれている。すなわち、この物語はコリアンダー古本屋の店内から始まったのである。冷たい雨の降りしきる11月の朝、まだ8時を少しまわったばかり、10歳頃の少年バスチアンが登校途中、この古本屋の店内へ駆け込んできたところだったのである。こうして登場してきたバスチアン・バルタザール・ブックス、この少年がこの物語の主人公である。バスチアンは、背は低く、肥っていて、エックス脚で、頭髪はこげ茶色で、顔色のさえない子供だった。要するに、バスチアンは醜い精彩のない弱々しい子供だったのである。

この古本屋の主人コリアンダー氏は、子供嫌いの今にも咬みつきそうなブルドックのような顔をした恐ろしいおじさんであった。コリアンダー氏はバスチアン少年の挙動を不審に思っ、頭っから疑って次のように言う。

「きっとおまえは、どこかのレジでお金でもかっぱらったんだろう。それともどこかのばあさんをなぐり倒したとか、それとも何か今どきのおまえみたいなやつらのやりそうなことをやらかして、警察に追いかけてられているのだろう？」

バスチアンは頭を横にふった。

「白状するんだ！」コレアンダー氏は言った。「いったい誰から逃げてきたんだ？」

「他のやつらからです。」

「他のやつらって、いったい誰だ？」

「僕のクラスの連中からです。」

「どうしてさあ？」

「やつらは…やつらは僕をいじめるんです。」

「そいつらはいったいおまえに何をするんだい？」

「学校の前で僕を待ち伏せしているんです。」

「それで？」

「僕にいろんなことをはやしたて、こずきまわしたり、馬鹿にして笑いものにしたりするんです。」⁽¹⁹⁾

コレアンダー氏に問われるままに、つらい身の上を語った。それによれば、バスチアンは次のような子だった。

① 日頃から級友からひどいいじめに会って悩み苦しんでいる。しかし、彼はいじめる学友に対して歯向かうことができない。弱虫、臆病者であった。

② 背が低く、肥満体で、X脚で顔色が悪い。容姿が醜く、劣等感にさいなまれていた。

③ のろまで非力で不器用だったので、体育は特に不得意だった。

④ 他の科目の成績も悪く、去年は落第した。要するに、落ちこぼれの生徒だった。

⑤ たった一つの得意技は、自分で物語を作ることであった。しかし、これとても彼には災いとなった。友達の前で作り話をする、ほら吹き、いかさま野郎とののしられる始末だった。それで一人で自分に語っていると、周りの者からは、くるくるパア、できそこない、と馬鹿にされるのがおちだった。

⑥ 学校の先生も彼の気持ちは理解してはくれなかった。他の子供と一緒にってからかったり、腹立ちまぎれにどなりつけたりするだけだった。つまり、彼には仲のいい友人も居なかったし、理解してくれる先生も居なかった。要するに学校では完全に孤独だった。

⑦ 母親はもう死んでいなくなっていた。

⑧ 歯科技工士をしている父親と二人暮らしだったけれども、母が死んでから

はこの父親との温かい心のかよい合いは何も感じられなくなっていた。こうして、家に帰ってもやはり完全に孤独であった。

こうして追いつめられたバスチアンが逃げ込んだところは、一人こっそりと読書に熱中することだけであった。

店の中の番台のはな先で、こんな内容のやりとりをしていると、奥の方で電話が鳴る。コレアンダー氏は、さき程バスチアンがこの店の中へかけ込んできた時、彼が読みふけていて、バスチアンと話し込んでいた間も片時も離さず手に持っていた本を椅子の上に置いて、電話が鳴っている奥の部屋へひっこんで行く。電話は長話になって、コレアンダー氏はなかなか出てこない。バスチアンの心は、磁石に引き寄せられる鉄のようにその本に引き寄せられて、その本を手にとって見る。それは、『はてしない物語』という標題の本であった。バスチアンは多少はためらいながらも、何が何なのかわからなくなり、無我夢中でその本をマントの下にかくして、だまってそっと店からぬけ出してしまった。頭をカッカさせながら学校に駆け込んだ。遅刻だ。今さら教室の中へ入って行く気にもなれず、彼はこっそり学校の屋根裏部屋の倉庫の中へもぐり込んでしまったのである。そして、今盗んできた『はてしない物語』という標題の本を読み始めたのである。ここまでをこの物語の第1場とすることにしよう。

ここで最速、少しややこしい問題が生じてしまった。表紙の色が少し暗い感じの赤であるとか、明の長方形だの暗の長方形だの、はたまた楕円形がどうしたこうしたとか、らちのあかないことを長々とまくしたてたあげくのはてに、やっと開いて読み始めたと思ったら、この本と全く同じ装丁で、全く同じ標題の本がこの本の中に出てきてしまったのである。それで混乱を避けるために、現に今我々が手に取って読んでいるこの赤っぽい表紙の『はてしない物語』という本をA本と呼び、バスチアンが盗んできて学校の倉庫の中で読み始めた『はてしない物語』という本をB本と呼ぶことにしよう。

この第1場は、A本のページで言えば、5ページから16ページまで、物語としての時間にすれば30分間かせいぜい1時間たらずのこと、バスチアンが登校する時の実際の出来事を語った部分である。しかし、この1時間たらずの出来事を通して、バスチアンの日常の状態・身の上がことごとく語られている。この第1場は、普通の本のように黒インクで印刷されてはおらず、茶色のインクで印刷されている。ただし、B本の『はてしない物語』という本の標題は、バスチアンがコレアンダー古書店で見た時は茶色で印刷されていたのに、学校の屋根裏部屋の倉庫の中にもぐり込んでこの本を読みはじめようとして手に取っ

た時には、緑色に変わっている。

第2場

第1場続く第2場は、A本のページで言えば17ページから190ページまでである。章立てで言えば、この本は第2場からやっと章が立てられているのだが、第I章「危機の中のファンタージェン国」から第XII章「さすらい山の古老」の終わりまでである。A本の物語の中の時間で言えば、バスチアンが学校の屋根裏部屋の倉庫の中でB本の『はてしない物語』を読み始めた朝9時少々前からその日の真夜中の12時までである。

この間、バスチアンは、今朝盗んできた『はてしない物語』という本、すなわちB本を一心に読みふけている。完全な覚醒状態を維持している。そして、倉庫の外の動きもちゃんと知覚している。外の近くの塔の時計が9時、10時、11時、12時、午後1時、2時、3時、4時、5時、6時、7時、8時、9時、10時、11時そして真夜中の12時を打つ音を全部はつきりと聞きとっている。B本を読みふけりながらも、下では今ごろは歴史の時間だ、みんなはこんな勉強をしているだろうなあとか、今ごろは体育の時間、みんなはあんな体操をしているだろうなあとか、気にもしている。その間に弁当を食べたり、こっそり便所へ用をたしに行つて、あわや見つかりそうになってドキドキする場面もある。B本を読みながら、興に入つて思わず知らず声に出して感想をもらしたり、思わず悲鳴をあげてしまう時もある。

そして、この第2場では、バスチアンが読み始めた『はてしない物語』は緑色の活字で印刷されているのに対して、その本の世界からぬけ出して現実の世界にたち帰ったバスチアンの心理描写とバスチアンの身の回りの現実の世界の描写は茶色の活字で印刷されている。それ故この第2場では、大部分が緑色の活字で印刷されていて、その中へ時々茶色で印刷されている部分が挿入されている形になっている。

では、ここでバスチアンが読み始めた『はてしない物語』とはどういう内容の物語なのであろうか。

この物語は、ファンタージェンという国の物語である。国とは言っても、それは一人の人間のようなものと思えばわかりやすい。人に各々名前があるように、この国にも名前がある。この第2場で語られているファンタージェン国には「おさな心の君」という名前が与えられている。人は生まれ、時には病気にかかり、死に、そして転生する——エンデは転生を信じている——。それと同

じようにこのファンタージェン国も、病気にかかったり、死んだり、転生したりする。というわけで、バスチアンが読み始めたこの物語は、ファンタージェン国のあちこちに虚無が発生しはじめ、それがどんどん広がりつつあるという危機の描写から始まっているのである。このことは、「おさな心の君」が病にかかり、その病がどんどん悪い方へ進行しつつあるということと同じことなのである。それ故、「おさな心の君」をこの病からお救いしなければ、ファンタージェン国は虚無によって消滅してしまうのである。そこで「おさな心の君」のこの病をなおすことのできる名医を探し出してここに連れてくるのが、このファンタージェン国の存亡にかかわる急務となる。この名医を探し出して連れてくる任務は、「おさな心の君」によってアトレユという緑の肌族の少年に託される。アトレユは数々の壮大なる大冒険の末、「おさな心の君」をこの病から救うことのできるのは、ファンタージェン国とは異次元の人間界に住んでいる「人の子」——実はこれがバスチアンである——以外にはいなく、その「人の子」によって新しい名前をつけてもらうしか方法はないことをつきとめる。アトレユは、あらゆる努力にも拘らず、この「人の子」を探し出し、「おさな心の君」のもとへ連れて行くことはできず、その病を治す術を報告しただけで、人狼アーガックスに噛まれた傷が原因で気絶する。他方、この物語を読みふけているバスチアンは、読んでいる物語の中に自分とそっくりの少年が、いやまちがいなく自分自身が、チラッと登場して来るのを見て驚き、不思議に思う。また、「おさな心の君」と一瞬視線を合わせて、自分がファンタージェンの国へ来て、「おさな心の君」に新しい名前をつけてくれるよう、強く願い求められていることをはっきりと意識する。しかし、臆病者のバスチアンにはそうする勇気がない。ためらったあげく、「月の子！僕、行きます！」と叫んだところで、この盗んで来て読みふけていた『はてしない物語』、つまりB本は終る。同時に、外の塔の時計は真夜中の12時を打つ。「月の子！僕、行きます！」というセリフを見て、我々読者は、バスチアンが本当にファンタージェン国へ行ってしまったような錯覚に陥る。しかし、本稿の筆者の考えで言わせてもらえば、バスチアンは眠りに陥ったのである。

第3場

『はてしない物語』A本は、191 ページから始まる第XIII章「夜の森ベレリン」から、第3場に入る。この第3場は、第XXIV章「生命の水」の章の途中、419 ページの4行目まで続く。この第3場はすべてバスチアンの眠りの中の世界、

すなわち夢の世界で繰り広げられる物語であるから、バスチアンには塔の時計が1時を打つ音も、2時を打つ音も、3時を打つ音も、4時を打つ音も、5時を打つ音も、6時を打つ音も、7時を打つ音も、8時を打つ音も聞こえない。翌朝8時すぎまで学校の屋根裏部屋の倉庫の中で眠り続けていたのである。眠っていたのであるから、外界に対する認識はない。あるのは無意識活動・夢想だけである。それ故、この第3場 191 ページ 419 ページの4行目まではすべて緑色の活字だけで印刷されている。

バスチアンが夢の中で見た物語も、ファンタージェン国の物語である。ただし、夢の中のファンタージェン国は、「月の子」という名前のファンタージェン国である。この「月の子」という名前のファンタージェン国は、「おさな心の君」という名前のファンタージェン国が死滅して（なくなって）転生した国である。この転生の介添役をはたしたのがバスチアンである。ということは、「人の子」⁽²⁰⁾ バスチアンは、不治の病・虚無病を患った「おさな心の君」をその病から救って新しい生命を獲得せしめた救世主であると同時に、玉のようにすこやかな「月の子」を誕生せしめた救世主でもある。それ故、バスチアンは「月の子」・ファンタージェン国では救世主として迎え入れられ、新生「月の子」・ファンタージェン国の国造りのすべてを原初から任されることになったのである。その全権委任の証として、バスチアンは「月の子」から「汝の 欲する ことを なせ」という銘の刻まれたメダル（お護り）、アウリンを預けられる。このメダルは、「月の子」・ファンタージェン国の化身である。何でも欲することを許され、欲したことすべてをそのまま実現する能力を与えられたバスチアン。この「月の子」・ファンタージェン国は、醜くて、弱虫で、いつも級友からいじめられ、孤独に悩んでいた落第生のバスチアンの愚行の場となる。愚行のはてに、バスチアンは自分の真の意志、本当の欲していることは何なのかを探しあてる。その瞬間、彼は目を覚ますことになる。

「お父さん！ 僕だよ —— バスチアン —— バルタザール —— ブックスだよ！」⁽²¹⁾

という夢の中、「月の子」ファンタージェン国の中での叫びは緑色の活字で印刷されている。この1行が、この本の中で緑色で印刷されている最後の行であり、ここで「月の子」ファンタージェン国の物語は終る。そしてこの行が『はてしない物語』A本の第3場の終りでもある。

第4場

この緑色で印刷されている行の後には1行分の空白があって、全く同じセリフが今度は茶色で印刷されている。ここからこの『はてしない物語』A本の最後の場である第4場が始まる。あとはこの本の最後まで一語の例外もなく、茶色の活字一色で印刷されている。

「お父さん！ 僕だよ——バスチアン——バルタザール——ブックスだよ！」

というセリフは、緑色と茶色とで2度印刷されているが、バスチアンはこの叫びを2度叫んだわけではない。夢の中での叫びがそのまま、目を覚ましたバスチアンの実際の叫びだったのである。こうしてバスチアンは「愛する」ことができるという意識の変革をとげて、夢の中のファンタジーエンの世界から現実の世界へ帰ってきたのである。この第4場は、第1場と同じく現実の世界での出来事として物語られる。

夢・現にこう叫びながら、ねぼけまなこであたりを見まわすと、そこは彼がきのうもぐり込んだ学校の屋根裏部屋の倉庫の中だった。バスチアンはきのうのことを思い出して、自分のマントを手で触ってみた。やはりまだ湿っていた。まわりを見まわしてみても、そこに置いてあるものはきのう見たものと同じで、そのたたずまいも同じだった。きのうの朝、コレアンダー古書店から『はてしない物語』という本を盗んできて、その本をここでこっそり読みふけっている内に眠りこんでしまったことを思い出して、その本を探してみた。しかし、不思議なことにその本はどこにもなかった。マットをひっくりかえし、倉庫の中を隅々まで探しまくってみたけれども見つからなかった。

その『はてしない物語』は消滅してしまっていたのである。⁽²²⁾

とにかくまず家に帰ることにして、ドアを開け、廊下に出てみたが、校内はしんと静まり返っていた。その時、学校の塔の時計は9時を打った。正面玄関のドアも鍵がかかっていた。この日は待降節の第1日曜休日だったのだ。バスチアンは2階の窓を開けて、工事のために組んであった足場をつたって地面におりた。バスチアンは無我夢中で家へと走り、お父さんの所へ帰って行った。

その日は、まる一日中、バスチアンはお父さんに、きのうの朝から今朝にかけてしたことや、夢の中で体験したことをことこまかにお話した。お父さんも、今までになく真剣に、しかも愛情と信頼をこめて、バスチアンの言葉に耳を傾けてくれたのである。

その翌日、バスチアンは自分からコレアンダーさんの所へ本を盗んだことを

お詫びするために行くと言い出す。おとといの朝からきのうの朝にかけてしたことを白状して、本を盗んだことを詫げる。ところが、事態はバスチアンが恐れていたこととは全然ちがう方向へと進んで行く。バスチアンが、本を読んでいる内に「月の子」のファンタージェンへ行ってしまった話をすると、彼もバスチアンの話に真剣に耳を傾け、バスチアンの言うことを信じてくれたのである。そして意外にも、バスチアンは彼の店から本は盗んでいない、と断言してくれたのである。この後、コレアンダー氏は、店から帰って行くバスチアンを温いまなざしで見送る。ここで第4場は終る。すなわち『はてしない物語』(A本)は終る。

『はてしない物語』の基本構想

エンデの著作活動の基本構想については、エンデ自身がいろいろな人との対談の中で、たびたび明言している。

エンデは、1982年初版の『オリーブの森で語りあう』(エンデ全集15、丘沢静也訳 岩波書店)の中で次のように言っている。

エンデ　ねえ、エアハルト、ぼくはね、『モモ』を書くとき、…純粋に詩的なことがらを気にしていた。それは、ぼくにとって、文化のコンセプト全体にかかわることなんだ。つまり、内部の世界を外部の世界にかえ、外部の世界を内部の世界にかえて、その結果、一方が他方のなかで再認識される。そうすることによってのみ、人間は自分の世界でくつろいだ気分になれる。そうでないとき人間は、世界でよそ者のままだ。というわけで、ぼくにとっては、現代のぼくらの世界の外的イメージを内的イメージにかえることが、重要だったんだ。(223 ページ)

『モモ』は1972年の作品だから1979年に初版が出された『はてしない物語』とは関係が疑わしいと考えるむきもあるかもしれないが、そうではない。1986年に初版が出された子安美知子著『エンデと語る』でも全く同じことを言っている。

エンデ　私がいつも試みるのは、…私たちの外界の形象を内面世界の絵姿に翻訳するというか、変容させるプロセスです。外なる自然の風景が、私たちの内心の風景に移しかえられます。(119 ページ)

更に、1989年4月14日号の『朝日ジャーナル』で、井上ひさし氏との対談では、ずばり次のように言っている。

エンデ　私の文学の創作法は、外の世界を内の世界に、内界を外界に換

えて描くという互換の方法をとっています。(24 ページ)

この基本的創作法は、当然『はてしない物語』にもつらぬかれているはずである。この基本的創作法はこの本の表紙のデザインにもつらぬかれているはずである。ここで表紙のデザイン（形象）をエンデの言葉（概念）におきかえれば、次のようになる。

長方形の { 明の部分＝外界（外界の形象・客観化された世界の形象）
暗の部分＝内界（内界の形象・主観化された世界の形象）

楕円周上の { 明の蛇＝外界（外界の形象・客観化された世界の形象）
暗の蛇＝内界（内界の形象・主観化された世界の形象）

楕円の { 一つを中心＝外界（外界の形象・客観化された世界の形象）
一つを中心＝内界（内界の形象・主観化された世界の形象）

『はてしない物語』は、外界の形象を内界へ投影し、内界の心象を外界へ投影する操作が「はてしなく」続けられる物語なのである。そして、外界を内界へ投影し（明）、内界を外界へ投影する（暗）ことによって、一つの世界すなわち、一つの楕円が実現するのである。

では、この外界と内界との相互投影は、この『はてしない物語』においては何をテーマとして、どういう手順を踏んで実現されるのか。

本稿の筆者はにこの『はてしない物語』を四つの場面に分けてその粗筋を紹介しておいた。ここで、それらの各場面を外界か、内界かという観点から考察しなければならない。

第1場

ここでは、10 歳くらいの少年バスチアンの身の上が客観的に語られている。ある日のこと、バスチアンが登校途中、古書店から『はてしない物語』という本を盗んで学校へ行って、ひとりこっそり学校の物置部屋にもぐり込んで今しがた盗んできた『はてしない物語』という本を手にとって読みはじめる場面である。この第1場は、外界の場面である。

第2場

この場面は、バスチアンが盗んできた『はてしない物語』という標題の本を読みふける場面である。時間は朝9時少し前からその日の真夜中の12時少しすぎまで、場所は学校の屋根裏部屋の物置場である。

この第2場においてはじめて、外界と内界との対が発生する。それは、バスチアンと本との対である。当然のことながらバスチアンはバスチアン、本は本であり、バスチアンと本は相互に外界である。読むという行為によって、バスチアンと本との間に外界——内界関係が発生し、この関係の中から新しい物語が生まれてくるのである。初めのうち、バスチアンは自分を本の外において、よそよそしいまなざしで本の中の登場人物を見ている。しかし、読み進むにつれてその本の内容に夢中になって行く。それにつれて、バスチアンは徐々にその本の中の登場人物へ近寄って行く、つまりその本の中へ入って行くのである。すなわちバスチアン（外界）と本の中の物語（内界）との対において生ずる相互投影の場において、話が進むにつれて次第に内界が支配的になって行く。この第2場は、物置場の中という外界の中ではあるが、最終的には限りなく内界化されて行く。

第3場

この場面は、眠りに陥ったバスチアンの夢の中で繰り広げられる世界である。時間は真夜中の零時すぎからその日の朝8時すぎまでの話である。場所は第2場と同じく、学校の物置場である。しかしこの第3場は初めから終わりまで夢の中の話であるから、零時から8時すぎまでという外の世界の時間とは全然関係はないし、学校の物置場とも関係はない。夢の中の話であるから、時・空も外界・内界もすべて、夢の中での時・空であり、夢の中での外界・内界である。夢の中での時・空は「月の子」という名称のファンタージェン国である。ファンタージェン国ではバスチアンは、「汝の 欲する ことを なせ」という任務を付託された万能の救世主である。万能の救世主バスチアンにとっての内界とは自分自身の全くありのままの欲望であり、自由意志である。救世主バスチアンにとっての外界とは、第1場に登場してきたあのありのままの自分自身の記憶である。本稿198ページから199ページにかけて、①から⑧で箇条書きしてある資質と事情をかかえたみじめなバスチアンが記憶としてファンタージェン国へやってきて、万能の救世主バスチアンの前に立つ。月の子・ファンタージェン国での物語はすべて、万能の救世主バスチアンと、よみがえった記憶としてのみじめなバスチアンとの間の切っても切れない関係の中から生まれてくるのである。万能の救世主バスチアンは、記憶の中のあわれなバスチアンを否定し、捨てつつ、それに対する補償願望のおもむくままに自己を実現して行く。この万能の救世主バスチアンの心象がそのまま「月の子・ファンタージェン国」な

のである。それ故、この第3場は、夢の中の内界の場である。

第4場

この場面は、目をさまして夢の世界から現実の世界に帰ってきてからの出来事が述べられている場面である。朝8時すぎ、学校の物置場で目をさまし、急いで父の待っている家へ帰る。バスチアンは、ひと晩中寝ずにバスチアンを探していた父のもとへ、ファンタージェン国で発見した「父を愛する」意志を、つまり愛をおみやげにして帰って行く。バスチアンはその日一日かけて、彼がファンタージェン国で経験した出来事を語り、おぼえがない程親身になって聞いてもらう。これによって、父子間に愛と信頼が生まれる。その翌日、バスチアンは、『はてしない物語』という本を盗んだことをお詫びするためにコレアンダー古書店へ出かけて行く。バスチアンはコレアンダー氏に、『はてしない物語』という本を盗んだこと、その本を読んでいるうちにファンタージェンという国へ行ってしまったこと、きのうの朝、目をさましたらこの世に戻っていたこと等を、そしてまた、彼がファンタージェン国で体験したこと等も、ことこまかくお話しして聞いてもらう。意外にも、コレアンダー氏はバスチアンの話を全部信じてくれる。この第4場は、かなり説明ぽい語り口になっている。この第4場は、『はてしない物語』のあとがきと見ることもできる。第4場は、外界の世界の場である。

簡潔に要約すれば次のようになる。

第1場 外界：現実の日常生活の世界

第2場 内界 }
第3場 内界 } ファンタージェンの世界

第4場 外界：現実の日常生活の世界

では、外界を内界に換えて描き、内界を外界に換えて描くというエンデの基本構想は、この『はてしない物語』の中で具体的にどのような内容で実現されているのであろうか。

第1の楕円

この本の中で初めて外界と内界との対が明確に成立し、この二つが不可分に関係して、それらが中心となって物語が進展して行くのは、すなわち初めて楕円が形成されるのは、本稿の筆者の言う第2場においてである。すなわち、バスチアンが『はてしない物語』(B本)という本を読みふけるという行為によっ

て、楕円が形成される。ということは、こういうことなのである。バスチアンの目の前に1冊の本があるというだけでは、その本は外界にある1個の物にすぎない。その本を手にとって表紙を開いて見ても、ただ何やら文字が見えるだけでは、その本はやはり心の外にある物にすぎない。バスチアンが、見える文字を読んだ瞬間、その文字はバスチアンの心の中の想念に生まれ変わるのである。つまり、読むという行為は、本という外界の中の物的存在を、想念・観念という心の中の存在に、つまり内界の存在に生まれ変わらせる行為なのである。

それ故、この第2場において成立している楕円の一方の中心は読み手としてのバスチアンであり、他方の中心はバスチアンによって内在化された『はてしない物語』(B本)の中の世界である。エンデの言う外界を内界に移し換えて描くということは、この第2場では現実のバスチアンを『はてしない物語』の中に移し換えて描くということである。他方、内界を外界に移し換えて描くということは、『はてしない物語』(B本)で語られている話をバスチアンの現実の姿に移し換えて描くということになる。この双方が成立してはじめて楕円が形成されることになる。

はたして、本当にそうなのだろうか。バスチアンが手に取って読み始めた本は『はてしない物語』という標題の本で、その本の第I章は「危機の中のファンタージェン国」で、この章は「ハウレの森の動物たちは、みな洞穴や巣や隠れ家に身をひそめていた」⁽²³⁾という書き出しで始まっている。

ある日の真夜中、ハウレの森の奥深い所で、鬼火族のプルップ、豆小人族のユックユック、夜魔族のヴシュヴーズル、それに岩喰い族のビョルンラハツアルクの4人がはち合わせになる。彼らは皆、ファンタージェン国の住人であるが、異なる方角の国に住んでいる住人で初顔合わせである。しかし話を聞いてみると、彼らの国にはいずれも、不可解な虚無が発生し、それがどんどん拡大しつつある、と言うのである。この4人は各々の種族の使者で、国を襲ってきたこの危機をファンタージェン国の女王「おさな心の君」に報告するために、女王の玉座のある「エルフェンバイン塔」へ急いでいるところだと言う。こうして情報を交換し合った後、彼らはふたたび一刻をおしんで先を急ぐため、各々自分独特の乗り物に乗って深夜のハウレの森の闇の中へ消えて行く。

そして――、あとはハウレの森の木々の梢に吹きあれる嵐のほか、何も聞こえなくなった。⁽²⁴⁾(ここまで緑色の活字、ファンタージェンの中の世界、内界)

続いて次からは、茶色で印刷されている。

近くの塔の時計が9時を打った。バスチアンはいやいや現実にはひきもどされた。…

…想像することこそ、バスチアンの得意なことだった。おそらく、たった一つの得意なことだった。…この本、今ここにあるこの本こそ、バスチアンの話そっくりだった。読んでいると、バスチアンには、太い幹がきしむ音や風が梢にざわめく音が本当に聞こえてくるばかりでなく、4人の奇妙な使者の各々のちがう声を聞きわけさえした。実に、森の土や苔のにおいまでかいでいるような気がした。

下の教室では、まもなく理科の授業が始まる頃だ。…⁽²⁵⁾ (ここまで茶色で印刷、現実の世界、外界)

ややしばらくの間現実界にひきもどされたバスチアンは、再び読む行為へもどって行く。そして続いて次からは、再び緑色で印刷されている。

一週間の後、小さな夜魔ヴェシュヴーズルは一番先に目的地に着いた。というより、一番先に着いたと確信していた。というのは空を飛んできたからだ。⁽²⁶⁾ (緑色の活字、ファンタージェンの中の世界、内界)

緑色で印刷されている部分は、バスチアンが読んで『はてしない物語』(B本)という本の中の文である。この部分は、外界の物としての本が、バスチアンの「読む」という行為によってバスチアンの表象・心象・想念・観念としてバスチアンの心の中へ取り込まれて行く部分である。つまり、「読む」という行為によって、単なる外界の物としての本が、心の中の世界(内界)に生まれかわって行くのである。しかし、エンデが自分の基本的創作法として「外界を内界に換えて描く」という時、彼が意図していたのは、おそらくはこういう意味においてはではない。エンデが本当に意図していたことは、本の読み手であるバスチアン自身が彼が読んで『はてしない物語』の中の登場人物としてその物語の中へ入って行くということなのだ。これも、バスチアンがこの本を読み進んで行くにつれて徐々に進行して行き、彼が今読みふけている『はてしない物語』(B本)の最後のXII、「さすらい山の古老」の章で完全に実現されることになる。「さすらい山の古老」の章の中では、バスチアンはもはやこの本の読み手ではなく、『はてしない物語』(A本)の中の正真正銘の登場人物となるのである。ありのままのバスチアンが、つまり外界のバスチアンが、はてしない物語の中へ、つまり内界に登場するのである。このことは、本稿でもう少し後に実証しなくてはならないであろう。

まずは再度、既に引用した「近くの塔の時計が9時を打った。」というくだりの考察にもどろう。この部分からは茶色の活字で印刷されていて、この部分は、バスチアンが読書の中から文字通り「現実にはひきもどされた」部分である。つまり内界から外界にひきもどされた部分である。こうして現実の世界に居ながら、ファンタージェンの世界（内界）の中の現象である「太い幹がきしむ音や風が梢にざわめく音が本当に聞こえてくるばかりでなく、4人の奇妙な使者の各々のちがう声を聞きわけさえした。」のである。つまり、読むことによって心の中に繰り広げられていた情景が、外界の現実の情景として意識されているのである。この部分では、内界が外界へ換えられて描かれているのである。こういう具合に、読書にふけりながら時々現実には引きもどされ、そして今読んでいた本の中でくり広げられていた情景がそのまま現実の世界の中での現象として描かれ、あるいはバスチアンのありのままの現実と重ね合わされて描かれる。こういうことは、読みふけて行くにつれてますます頻繁に出現してくる。

ここでもうしばらくバスチアンが読み始めた『はてしない物語』（B本）にもどることにしよう。ファンタージェン国のあちこちで発生している虚無の原因は、女王「おさな心の君」が病で臥せっているからだという。だから、ファンタージェン国を消滅から救うためには、「おさな心の君」を病から救う他ない。ところが「おさな心の君」を病から救うことができる者は、ファンタージェン国には一人も居ない。しかしとにかく、この国を消滅から救うためには「おさな心の君」の病をなおすことのできる者をなんとしても探し出し、そのお方を「おさな心の君」のもとへおつれしてこななければならない。このおおいなる探索の任務を「おさな心の君」によって託されたのは、ファンタージェン国の住人で緑の肌族の狩人の少年アトレーユだった。アトレーユもバスチアンとほぼ同じ10歳くらいの少年だった。バスチアンが読み始めた『はてしない物語』（B本）は、このアトレーユの「おおいなる探索」の冒険談だったのである。

アトレーユは、彼が仕留めんとして矢を放たんとした瞬間思いとどまって命を助けてやった緋色の野牛から、北の「憂いの沼」へ行ってそこに棲んでいる太古の沼ガメ、モルラを訪ねるよう教わる。太古の沼ガメ、モルラから、南のお告げ所のウユララの所へ行けば教えてもらえるかもしれない、と聞き出す。南のお告げ所へたどり着き、謎の門、魔法の鏡の門、鍵なしの門を次々に通りぬけてやっとアトレーユはウユララのお告げを聞くことができたのである。ウユララのお告げによれば、ファンタージェンの国を救うためには、「外の国」から「人の子」がやって来て、「おさな心の君」に新しい名前をつけてあげる以外

に方法はない、という事であった。こうしてアトレュはついに、「おさな心の君」の病を癒す方法は探し当てることはできたけれども、肝心の「人の子」を探し出して連れて行くことはできない。なぜなら、生れも育ちも純粹にファンタージェン国の者であるアトレュにとっては「外の国」は彼岸の国であって、そこへ行くことができないからである。心ならずも一人で「おさな心の君」のもとへ帰還してアトレュは任務を完了する。帰還の途中、人狼アーガックスに咬まれた深傷とこれまでの積もり積もった疲労のため、アトレュは「おさな心の君」のひざもとで倒れて深い眠りに陥る。ここまでのバスチアンが読んでいる『はてしない物語』（B本）の最後の一つ前のXI、「女王おさな心の君」の章までの粗筋である。本稿の一つの結論として、バスチアンが読みふけている『はてしない物語』（B本）のI、「危機の中のファンタージェン国」の章からXI、「女王おさな心の君」の章までの話によって第1の楕円が形成されているのである。この次第を以下においてはっきりと実証することにする。

次は、緑色で印刷されている。

カイロンは、その昔ケンタウロスと呼ばれていた種族のもので、腰までは人間、その下は馬の体をしていた。…首には、鎖にさげた大きな黄金のお守りをかけていた。そのお守りの表には、明と暗の2匹の蛇が互いに相手の尾を咬み、楕円形につながっているのが見えた。⁽²⁷⁾（ここまでは緑色、内界）

これに続いて、次は、茶色で印刷されている。

バスチアンは、はっとして中断した。そして本を閉じ…、あらためて表紙を眺めてみた。やはりそうだった。2匹の蛇が互いに相手の尾を咬み、楕円形につながっている！⁽²⁸⁾（ここまでは茶色、外界）

ここでは内界が、正確に外界へ換えて描かれているのである。このことは物的な事象にとどまらない。バスチアンの身の上にも及んで行く。

次は緑色で印刷されている。

おさな心の君は、ただ実在するだけだった。けれどもそれは特殊な実在だった。

— おさな心の君は、ファンタージェン国のあらゆる命の中心だったのだ。

女王の死はとりもなおさずすべての生きものの終末であり、広大無辺のファンタージェン国の滅亡を意味するからである。（ここまでは緑色、内界）

これに続いて、次は茶色で印刷されている。

バスチアンの心はそれだ。急に、お母さんが手術をうけた病院の長い廊下が目の前に浮かんだ。彼は何時間も手術室の前でお父さんと一緒に座って待っていた。お医者さんたちや看護師さんたちがあわただしく行ったり来たりしていた。…やがて白衣の頭のはげた人が疲れはてて悲しそうな顔をして出てきた。そして、できる限りの手はつくしたけれどもだめでした、お気の毒です、と言った。

それからだった、バスチアンとお父さんとの間が何もかも変わってしまったのは。⁽²⁹⁾（ここまでは茶色、外界）

ここでは、「おさな心の君」の死（内界）の概念が、バスチアン自身のお母さんの死（外界）という現実の悲しい出来事と重ね合わせて描かれているのである。

更に、バスチアンは本の中の世界（内界）に対応して行動するようになる。次は緑色で印刷されている。

最初の日、彼らは白銀山脈を越えた。…おなかがすくと、少年は鞍につけておいた袋に入れてある野牛の乾燥肉1切れと、小さい草の実せんべいを2枚たべた——あの狩のために用意したものだった。（ここまでは緑色、内界）

これに対して、次は茶色で印刷されている。

「ほら見ろ！」とバスチアンは言った。「誰だって時々は食べないわけにはいかないのだ。」

彼はそう言って、かばんの中から弁当を取り出し、それを開けて、注意深く二等分し、半分はまた包んでかばんの中にしまった。そして、その半部分をたいらげた。⁽³⁰⁾（ここまでは茶色、外界）

以上、本の中の情景（内界）が、現実界のバスチアンの情景（外界）におき換えられている例を見た。

次に、これとは逆に現実のバスチアンの行動や状態（外界）が、そのまま本の中の情景（内界）へ移し換えられている例を見てみよう。

次は緑色で印刷されている。

イグラムールは何者かが自分に近づいてくる気配を感じとって、すばやく動きまわった。イグラムールの姿はゾッとするほど恐ろしいものだった。今やそれはひとつ目のはがね色の巨大な顔に変じていた。想像を絶する悪

意に満ちた縦長の瞳がアトレュをにらみつけていた。(ここまでは緑色、内界)

すぐ続いて次は、茶色で印刷されている。

バスチアンは恐怖のあまり低い叫び声をあげた。(茶色、外界)

すぐ続いて次は、緑色で印刷されている。

恐怖の叫び声が、奈落の淵にひびき渡った、そしてこだまとなって反響しあった。イグラムールは、ここにはまだ別の者が居るのではないかと思って、左右キョロキョロ見まわした。というのは、その恐怖の叫び声をあげたのはアトレュであるはずはなかった。目の前にいる彼は恐怖のあまり麻痺したように立ちすくんでいたからである。(ここまでは緑色、内界)

すぐ続いて次は、茶色で印刷されている。

「イグラムールが聞きつけた叫び声は、ひょっとしたら自分の叫び声だったのではなかろうか？」そう思ってバスチアンは心底ぞっとした。⁽³¹⁾(ここまでは茶色、外界)

このように、バスチアンが本当にあげた叫び声(外界)が、物語の中(内界)の叫び声となっているのである。叫び声だけではなく、更には現実のバスチアンの姿までが本の中(内界)に登場するのである。

次は茶色で印刷されている。

バスチアンはギョッとした。暗い隅で何か人影が動いたからである。もう一度よく見ると、そこには大きな半分くもっている鏡があって、さき程見たのはその鏡にうつった自分自身の姿だとわかった。彼はそれに近づいて行って、しばらくの間しげしげと見つめた。でぶでX脚、このチーズのような顔、どう見ても美しいとはいえなかった。彼は頭を横にふって、大声で言った。

「だめだ！」

それからまたマットへもどった。今はもううす暗くなっていて、本を顔にグッと近よせなければ読むことができなかった。⁽³²⁾(ここまでは茶色、外界)

次は、緑色で印刷されている。

アトレュの前には、今やそこに…〈魔法の鏡の門〉があった。それは大きくてまんまるで…ピカピカの銀のように輝いていた。この金属の板を通りぬけることができるとはとても信じられなかった。しかしアトレュには一瞬のためらいもなかった。自分自身のゾッとするような姿がこの鏡の

中で近づいてくるであろうと予想はしたが、一切の恐怖を捨てた今では、そんなことは考えるにも値しなかった。

ところが彼が見たのは、そんな恐ろしい姿ではなく、予想もしていなかった、また理解しがたいものだった。彼が見たのは、マットの上に脚を組んで本を読みふけている青白い顔をした肥った少年だった——年ごろは自分とほぼ同じ少年だった。(ここまでは緑色、内界)

すぐ続いて次は、茶色で印刷されている。

今読んだ箇所の内容を理解して、バスチアンは縮みあがった。それは確かにバスチアンだった。その記述は細部にいたるまでぴったり合っていた。彼はその本を手に持ったままガタガタ震えた。⁽³³⁾ (ここまで茶色、外界)

こうして、現実のバスチアンが完全に本の中のファンタージェンの世界の中にとり込まれたのである。これ以後は、外の世界のバスチアンと、ファンタージェンの世界の中の登場人物が対等に呼応しあって話が進んで行くのである。

次は緑色で印刷されている。

今やついに、アトレュはなすべきことを知った。ファンタージェン国の彼岸の世界からやってくる人の子だけが、おさな心の君に新しい名前をさしあげることができるのである。彼は人の子を探し出し、おさな心の君へ連れて行かなければならないのである。(ここまでは緑色、内界)

すぐ続いて、次は茶色で印刷されている。

「ああ、」バスチアンは思った。「僕が彼女を——彼女だけでなくアトレュをも——助けてあげたらいいのになあ。僕だったらとびっきりすてきな名前を考え出してあげるのになあ。どうしたらアトレュのところへ行くことができるのだろう、それがわかりさえしたらなあ、そうすれば僕は今すぐにでも行くんだけどなあ！」⁽³⁴⁾ (ここまでは茶色、外界)

更にこれにすぐ続いて、緑色で印刷されている。

バスチアンは不意にモクレン宮の入口に立っていた。彼は入って行った——そして目の前に、望みを続べたもう金の瞳の君の顔を真正面から見た。… (ここまでは緑色、内界)

更にすぐ続いて、次は茶色で印刷されている。

バスチアンはハッとした。…1秒の何分の1か、稲妻の光るほどのわずかの間ではあったが、彼は目の前におさな心の君の顔を見たのである。空想などでは絶対になかった。たしかに自分の目を見たのだ！…その瞬、バス

チアンはおさな心の君の名前がわかった、月の子だ。これこそおさな心の君の名前だ、疑いもなくこれだ。あの時たしかに月の子がバスチアンを見たのだ——バスチアン・バルタザール・ブックスを！あのまなざしにこめられた表情が何だったのか、バスチアンにはわからなかった。…⁽³⁵⁾（ここまでは茶色、外界）

そして、XI、「おさな心の君」の章の中では、まるで我々の世界での普通の人と人との会話のように、バスチアンとおさな心の君との間の交感が、すなわち外界と内界との間の交感が成立する。

次は、緑色で印刷されている。アトレーユはおさな心の君にたずねる。

「…もしあなたのおっしゃる通り、私は私の任務をまっとうしたのなら、——なぜその救世主はここにいないのですか？ そのお方は、何を待っているのですか？」「そうですね」とおさな心の君は小さな声で言った。「何を待っているのでしょうかね。」（ここまでは緑色、内界）

すぐ続いて次は茶色で印刷されている。

バスチアンは手に汗を握る思いだった。「だって僕はできないよ。」と彼は言った。「僕が何をしなければならないのか、僕は本当に知らないんだよ。それに、ひょっとしたら僕が思いついた名前は正しくないのかもしれないし。」（ここまでは茶色、外界）

すぐ続いて、次は緑色で印刷されている。

「もう一つ、おたずねしてもいいですか？」

アトレーユはまた話し始めた。…

「なぜ新しい名前をつけてもらおうと、女王様はお元気におなりになるのですか。」

「正しい名称だけが、すべての生き物にもすべての物事にも、現実性を与えることができるのです。」と彼女は言った。

「まちがった名称はすべてを現実的でないものにします。それこそがいつわりのなせる仕業なのですよ。」

「ひょっとしたら、彼は女王さまにさしあげる名前をまだ知らないのかもしれないかもしれません。」

「そんなことはありません。彼はちゃんと知っています。」

また二人は、黙ったまま座っていた。（ここまでは緑色、内界）

すぐ続いて、次は茶色で印刷されている。

「そうだよ、僕は知っているよ。僕は女王さまを見た時、すぐわかったんだ。しかし、何をしなければならないのか、それがわからないんだ。」（ここまでは茶色、外界）

すぐ続いて、次は緑色で印刷されている。

アトレーユは顔をあげた。

「ひょっとしたら、彼は来たいのだけど、どうしたらいいのかわからないのです。」「彼は何もする必要はありません。」「とおさな心の君は答えた。「彼が知っている新しい名前で私を呼んでくれさえすればいいのです。それだけで十分なのです。」（ここまでは緑色、内界）

すぐ続いて、次は茶色で印刷されている。

バスチアンの心臓は再びはげしくドキドキしはじめた。口に出して言ってみようか？でも、失敗したらどうしよう。全く勘違いしていたらどうしよう。もしあの二人が話しているのが僕のこともなんかではなく、全然別の救世主のことを話しているのだったらどうしよう。本当に僕のことを言っているのだと、どうしたらわかるのだろう。⁽³⁶⁾（ここまでは茶色、外界）

こうして内界が外界につながり、同時に外界が内界につながって、そして内界と外界が交互に循環し合って、楕円形の循環が完成したのである。これが、第1の楕円である。

第2の楕円

第2の楕円は上記の第1の楕円と不可分の関係にある。第2の楕円は、この第1の楕円を自己の一つの中心として自己の内部に組み入れ、第1場をもう一つの中心とすることによって成立する。

第1の楕円は、バスチアンが盗んできて読みふけている『はてしない物語』のI.「危機の中のファンタージェン国」の章から、XI.「女王おさな心の君」の章の領域をおおう楕円であった。バスチアンはこの話を自分の現実を重ね合わせて読んでいううちに、自分のことがこの物語の中で語られていることに驚き、かつ不思議に思う。でもそれは彼が読みふけている物語、つまり作り話でしかない。バスチアンはあくまでも、この物語の外の存在なのである。バスチアン自身として、読み手（外界）であることをやめて、正真正銘この物語の中の一員になりたいといかに強く願望しても、今のバスチアンにはそれができない。他方、おさな心の君の方でも、ファンタージェン国を消滅から救うため

には、どうしてもバスチアンにファンタージェン国に来てもらって、新しい名前をつけてもらわなくてはならない。しかし、おさな心の君の方でも今はそれを実現できない、否、実現しない。こうして、確固として外界は外界であり続け、内界は内界であり続け、そうである限り第1の楕円は成立し得たのである。

しかし、双方の願いがかなって、物語の読み手としてのバスチアン（外界）が読み手であることをやめて『はてしない物語』の中へ入ってしまえば、すなわち正真正銘その物語の中のバスチアン、即ち内界のバスチアンになってしまえば、その瞬間、外界は消滅して内界しか残っていない状態になる。そしてこの瞬間、第1の楕円は消滅してしまう。読み手としてのバスチアンの消滅、即ち外界としてのバスチアンの消滅は、外界としての第1場を「おさな心の君」のファンタージェン国の中へ取り込むことによって実行されるのである。そして、それによって第2の楕円が実現されるのである。この魔術は、次のXII.「さすらい山の古老」の章で行われることになる。

というわけで、XII.「さすらい山の古老」の章の解説へ進むことにしよう。おさな心の君は、重傷を負いながらも任務をまっとうしたアトレュを洞窟の中の生命の泉へ送りどけて、一人、「さすらい山の古老」と出会うために、見えない四つの力によってかつがれている輿にのってさすらいの旅に旅立つ。「さすらい山の古老」は、女王おさな心の君にとってさえも意のままにすることのできない存在である。出会えるか否かも運命なのである。なお、アトレュが命の泉へ送りどけられたということは、アトレュが死んで転生したことを意味している。これは後になればわかる。

ファンタージェン国は今やほとんど大部分虚無におかされていた。どこをどうたどろうとも、それは奈落の淵をたどる旅路であった。輿はやがてファンタージェン国で最高最大の山脈である「さすらい山」にさしかかる。「さすらい山」は「運命の山」とも称されている。輿は見えない4つの力にかつがれて、筆舌を絶する断崖絶壁をたどって山頂にたどりつく。意外にもそこは一つの国ほども広い平原であった。その高原の真中に珍しい形の山がつき出ている、その上に一つの大きな卵があった。その卵には一つの窓があった。その窓に一つの顔が現れた。それが「さすらい山の古老」であった。その窓からは文字で出来ている梯がおりてきたのである。おさな心の君は輿を降りて、一人でその梯を昇って行き、その卵の中へ入って行く。ついに「さすらい山の古老」との面会をはたしたのである。

さて、ではこの「さすらい山の古老」とは何者か。彼は「ファンタージェン

の記憶」⁽³⁷⁾なのである。記憶は過去を再現することはできるけれども、その過去を変えることはできない。そして記憶は未来を含むことはできない。ファンタージェン国の誕生から現在まで＝ファンタージェン国のすべて＝ファンタージェン国そのものを人格化したもの、この点では「さすらい山の古老」は「おさな心の君」と同格である。しかし、「さすらい山の古老」はファンタージェン国の過去性＝不可変性を人格化したものであり、「おさな心の君」はファンタージェン国の未来性＝可変性・可能性＝望みを人格化したものであるという点では、「さすらい山の古老」は、「おさな心の君」と対極的なものなのである。だから彼は次のように言う。

「わたしはすでに起こったことをさかのぼって見返すことしかできない。書き記す間にそれを読むことはできる。読んだから知っておる。生じたから書き記した。こうしてこのはてしない物語は、わたしの手によって書かれた。」

「では、なぜわたくしがあなたのもとへきたか知らないのですね。」

「知らぬ。」古老は書き、おさな心の君はその暗い声を聞いた。「君がそうしなければよいが、と願っておった。わたしを通せば、すべてのものは変わることができなくなり、最終的なものになる——望みを続けたもう金の瞳の君、あなた自身もじゃ。この卵は君の墓、君の柩じゃ。君はファンタージェンの記憶に足をふみいれたのじゃ。どのようにして、ここから再び出て行かれるつもりじゃ。」

「卵はみな、新たなる生命の始まりです。」

おさな心の君は答えた。

「その通り。」古老は書き、言った。「だが、それは殻が割れた場合のみじゃ。」

「新しい始まりをつくることのできるのは、」古老は書いた。「人の子のみ。」

「そうです。」おさな心の君は言った。「人の子です。」⁽³⁸⁾（ここまで緑色、内界）

そして、ついに、次のように言う。

「その物語をお話ししなさい！」おさな心の君は命じた。「ファンタージェンの記憶である古老よ、そのお話を私に語りなさい——最初から、一語、一語、あなたが書き記しておいたその通りに！」⁽³⁹⁾（ここまで緑色、内界）

未来が見えない古老は、なおもおさな心の君に思いとどませようとする。しかし、おさな心の君は、バスチアンに運命を託して古老に命令する。

「では、わたしの願いどおりにしなさい！」さすらい山の古老は、おさな心の君の意志に屈し、はてしない物語を最初から語りはじめた。

その瞬間、本のページからさす光の色が変わった。古老の筆が刻々綴って行く字と同じ、赤みをおびた色になった。僧服も頭巾も、あかがね色に変わっていた。文字が綴られると同時に、彼の深い声がひびいた。⁽⁴⁰⁾（ここも緑色、内界）

我々読者は普通、バスチアンと一心同体となってこの本を読んでいるから、この古老はバスチアンが読みふけていた『はてしない物語』B本の始めから、すなわち「ハウレの森の動物たちは皆、洞穴や巣や隠れ家に身をひそめていた。」という箇所から語り始めるものと思ってしまう。

ところがここで意外なことが起きてしまったのである。なんと、古老が語り始めた物語は、『はてしない物語』（A本）の書き出しからだったのである。すなわち、「こんな字が、ある小さい店のドアのガラスに書かれていた。」（茶色、現実）という言葉からだったのである。それ故、その瞬間、本のページからさす光の色が赤みをおびた色（外界）に変わったのである。過去は変えようがない、茶色（外界）は茶色（外界）だから永遠に茶色（外界）であり続ける。しかし、古老がおさな心の君の命令によって語りなおした文言は、今バスチアンが読みふけている『はてしない物語』の中の出来事（内界）である。従って、

こんな字が、ある小さい店のドアのガラスに書かれていた。…⁽⁴¹⁾（緑色、内界）

という文言は緑色（内界）に変わっているのである。従って、バスチアンが古老の語りを通して聞いた『はてしない物語』は一語一句——もちろんバスチアンという語も含めて——全部、緑色（内界）だったのである。こうして、さすらい山の古老は『はてしない物語』の世界を第2場からさかのぼって第1場まで拡大することによって、B本の読者としてのバスチアン（外界のバスチアン）を消滅せしめ、ファンタージェンの中の登場人物としてのバスチアン（内界のバスチアン）に変身せしめたのである。ということは、第1の楕円の二つの中心のうちの一つの中心（外界）が消滅したことを意味する。ということは、とりもなおさず第1の楕円の消滅を意味する。そしてこの消滅した第1の楕円は新たな内界1極と化する。これが新たな楕円の一つの中心（a）となる。

他方、さすらい山の古老が、「こんな字が、ある小さい店のドアのガラスの上に書かれていた。…」と語り、綴ることにより、彼は『はてしない物語』の中

に第1場（外界）を取り込んでしまったのである。そしてこのさすらい山の古老の記憶としての外界が新たな楕円のもう一つの中心（b）となる。

こうして、さすらい山の古老の語る『はてしない物語』は、（a）と（b）を二つの中心とする新たな楕円となる。これが第2の楕円である。

しかし、この第2の楕円も、運命は第1の楕円と全く同じである。物語が進展して行けばこの第2の楕円も内界に1極化し、この第2の楕円は消滅する。それと同時に更に新たな楕円の一方の中心と化して行くのである。これは、この第2の楕円が成立した最初から客観的にそうなっているのである。それはこういうことである。さすらい山の古老の原記憶としては第1場はすべて茶色（外界）で、第2場では緑色（内界）と茶色が交互に出現して来る。このことは既に起こったことであって変えようがない。それ故、第2の楕円は成立し得たのである。つまり、第2の楕円の外延は、第1の楕円の外延の及んでいる第2場のみから、更に第1場をも含めた領域へ拡大されたものなのである。しかし、その原記憶にもとづいてさすらい山の古老によってひとたび語られ、綴られてしまえば、それは、ファンタージェンの中での出来事になるから、本稿で既に指摘しておいたように、始めから終りまで、途中も、全部緑色（内界）となるのである。こうして、バスチアンが古本屋から『はてしない物語』（B本）という本を盗んできたことも、学校の屋根裏の物置部屋にもぐり込んで、その本を読み始めたことも、すべてファンタージェンの中（内界）の出来事になってしまったのである。この第2の楕円は、成立の当初から内界に1極化する可能性を客観的に保持していたのである。この第2の楕円が消滅して内界として1極化するのとは、これと必然的に結合せざるをえない外界としての極が発生する時である。それはまた後の話、それまでは第2の楕円は楕円として存続する。

それはそれとして、おさな心の君がさすらい山の古老に命じて、「こんな字がある小さい店のドアのガラスに書かれていた。…」から語りなおさせたのには、それとは別の目的があった。おさな心の君の目的は、バスチアンに彼が既に『はてしない物語』の中の登場人物であることをはっきりと見せつけることによって、バスチアンに新しい行動をとるよう促すことだったのである。しかし、これはあくまでも賭である。バスチアンがそうするか否かは、ひとえにバスチアンの自由意志にかかっているのである。おさな心の君は、これが賭であることはよく知っている。おさな心の君は、バスチアンの自由意志に自分の生死を、すなわちファンタージェン国の存亡をゆだねたのである。もしもバスチアンが、ここに到ってもなおちゅうちょしゅんじゅんするだけで何の新しい行動をもと

らなければ、この『はてしない物語』は、「では、わたしの願いどおりにしなさい！」の所まで来ると、まるでエンドレステープのように、その次は「こんな字が、ある小さい店のドアのガラスの上に書かれていた。」という文にもどって、永遠に無限回、一語一句たがわず、全く同じ物語を繰り返すことになる。そうなれば、おさな心の君の病は永遠に癒されることはなくなるし、バスチアンも永遠にこの物語の中から脱け出せなくなるのである。そして、物語の新しい展開は全くなくなるのである。これは、「はてしない」物語ではあっても終りのない終りである、いわゆる悪魔の環にとらえられて、そこから脱出できない状態に陥るのである。この悪魔の環は克服されなければならない環なのである。

悪魔の環から脱がれる術はあるのか。エンデは次のように語っている。

エンデ 人間の自由を認めるか否かの問題です。自由があるとしたら、人間の全行為を原因・結果では説明できない。逆に因果論を人間にあてはめるとしたら、そこには自由は存在しない。そして、人間のなかに自由がないとなると、創造力も認めないことになります。人間の創造性というのは、いつも因果律的束縛なしに、何かまったく新しいものを、自分のなかから生み出すことです。新しい芸術フォーム、新しい理念、新しい行動様式、それを自分のなかから出してくること。そしてまさにそのなかにこそ、人間の価値があると私は思います。それが人間と動物とを区別するものでしょう？…新たな始まりをつくりだす力こそ、神と人間に共通する力だし、人間の真の価値なのです。⁽⁴²⁾

バスチアンは、エンデの思想の実行者である。次は茶色で印刷されている。

…今こそ彼にもわかった。永遠に繰り返されるこの環こそ、終りなき終りだった！

涙が頬をつたって流れたのにバスチアンは気がつかなかった。ほとんど気を失ったような状態で彼は突然叫んだ。

「月の子！僕 行きます！」

この瞬間、同時にたくさんのことが起こった。(ここまで茶色、外界)
すぐ続いて、緑色で

大きな卵の殻が遠雷のような響きをたてながら、ものすごい力で砕け散った。遠くから、突風が吹いてきたかと思うと、(ここまでは緑色、内界)
すぐ続いて、茶色で

バスチアンが膝の上にのせておいた本のページの中から吹き出してきて、

バタバタと荒々しくページをあおった。突風がバスチアンの髪や顔に吹きつけ、息も出来ない程だった。七枝燭台のろうそくの炎はおどり、横なぐりにたなびいた。そして更に強い第2の突風が本の中から吹き出してきて、ろうそくの炎は消えた。

塔の時計は12時を打った。(ここまでは茶色、外界)

ここでXII、「さすらい山の古老」の章は終って、XIII、「夜の森ペレリン」の章へ行って、緑色の印刷で、

「月の子！僕 行きます！」(緑色、内界)
と続いているのである。

こうして、ついにバスチアンは、自分の自由意志によって新しい行動を取ったのである。自分の自由意志によってファンタージェン国へやってきて、「月の子！」と呼びかけることによっておさな心の君に新しい名前をつけてやったのである。こうしてファンタージェン国もおさな心の君も、再び新しい玉のようにすこやかな生命を得て転生・誕生し、新しい名前をもらって、再び新しい生命を生きなおすことになったのである。

この物語ではバスチアンはファンタージェン国へやって来た、ということになっている。けれども本稿では、話をわかりやすくするために、バスチアンは眠り込んでしまった、ということにしよう。そうすれば、「月の子」のファンタージェン国は、バスチアンの眠の中の世界ということになり、「月の子」ファンタージェン国での出来事は、バスチアンの夢の中での出来事ということになる。

第3の楕円

バスチアンの夢の中の世界、すなわち「月の子」ファンタージェン国が、第3の楕円を形成している。本で言えば、XIII、「夜の森ペレリン」(191ページ)から、この本の最後の章XXVI、「生命の水」の途中(419ページ)までである。この部分は、バスチアンの夢の中の話であるからすべて緑色(内界)で印刷されている。しかし、夢の中のバスチアンにとっては、厳然として内界と外界の区別が存在している。

「月の子」ファンタージェン国では、バスチアンは「おさな心の君」のファンタージェン国を虚無から救った「救世主」として、アラビアのどこかの国の若い王子さまのように頭にターバンを巻いて、美しく、りりしく、気品のある

姿で登場する。「月の子」は「救世主」バスチアンに、新生ファンタージェン国のすべてを委任する。この委任は、「月の子」自身を物体化したメダル「アウリン」を、つまり「月の子」の身の代ともいべき「アウリン」を、月の子がバスチアンに預けることによって行われる。そのメダル「アウリン」には、「汝の欲する ことを なせ」という銘が刻まれているのである。こうして、バスチアンには完全な自由意志と意志したこと・欲したことすべてをそのまま実現する運命が預けられたのである。この「救世主」バスチアンの自由意志、これが内界であり、第3の楕円の一つの中心である。

物語としてはバスチアンがファンタージェン国の中にはいつてきたとはいっても、それは本当はバスチアンがついつい眠り込んでしまっただけのことだ。夢の中ではバスチアンは「救世主」であっても、本当は第1場で描かれていたように、弱虫で、落ちこぼれの、みじめで孤独なバスチアンにすぎないのである。夢の中では、この第1場で示されていた現実のバスチアンの姿が記憶となって、明確に現れてくるのである。現実の自分自身の記憶が、夢の世界では外界として機能する。この記憶が、第3の楕円のもう一つの中心となる。

つまり、「月の子」ファンタージェンの世界は、完全な自由意志と願望すべてを実現することのできる万能とを与えられたバスチアン（内界）と、現実のみじめなバスチアンの記憶（外界）との不可分の関係によって形成される楕円世界なのである。

では、月の子、ファンタージェン国でこの内界と外界との相互おき換えがどのようにして実現されるかを、次に見て行くことにする。

「月の子！月の子！僕 行きます。月の子！ほらもう、僕きました。」⁽⁴³⁾

気づいてみると、バスチアンは快適でしあわせな闇の中にいた。バスチアンは月の子から一粒の砂つぶ程の光の粒を手の中にもらう。それは、おさな心の君のファンタージェン国で残った唯一のもの、この月の子ファンタージェン国へもたらされた唯一のものであった。その光の粒は、無限の可能性であった。その光の粒はバスチアンの手のひらの中でたちまち種子と化し、そこから月の子ファンタージェンの太初の生命の繁茂の森が生じたのである。バスチアンは、月の子にうながされるままに、その森に「ペレリン」という名前をつける。この森にペレリンという名称を与えることにより、バスチアンは、この夜の森ペレリンの王となる。

今まで再三再四使われてきた「人の子」という言葉づかいといい、この新生

ファンタージェン国の原初の情景といい、言葉・名称にエンデが与えている力といい、これらはすべては新約聖書のヨハネによる福音書の冒頭の部分を連想させるものである。

月の子はバスチアンに、呼んだ時なぜすぐ来てくれなかったのかとたずねる。

「だって——、それは——、」バスチアンは当惑した。

「僕——、いろんなこと、考えちゃって——、こわかったし——、でも本当は、あなたの前に出てくるのが恥ずかしかったんです、月の子。」…

「恥ずかしいですって？ どうして？」

「ん——、つまり——、その——、」バスチアンは口ごもった。「だってあなたは、誰かあなたにふさわしい人を待っていたのでしょうか？」

「ではあなたは、あなたは私にふさわしくはないのですか？」

「そ、それは、」バスチアンはどもって、顔が赤くなるのを感じた。「僕が思うあなたにふさわしい人というのは、勇気があって、強くて、美しくて——王子さまみたいな人、——とにかく僕のような子ではない人です。」⁽⁴⁴⁾

このようにバスチアンは、月の子ファンタージェン国＝夢の中のファンタージェン国の中へ、第1場で描写されていた現実のバスチアンをそのまま持ち込んできているのである。その続きを見ていこう。

バスチアンは目をふせてしまう。ややしばらくして月の子は言う。

「バスチアン、あなたに見せたいものがあります。わたしの目をごらんなさい！」

バスチアンは…いわれるままにした。すると、月の子の金の瞳にポツンと小さい人影が映り…だんだん大きく、はっきりしてきた。それはバスチアンと同じ年頃の少年だった。しかし彼はスラッとしていて驚くほど美しい少年だった。誇り高く毅然とした姿勢、気品に満ちた顔だち、面長で、りりしい顔。彼はさながら東方の若い王子さまだった。…彼の最も美しいところは、その手で、ほっそりと上品でありながら、それでいて並々ならぬ力強さを感じさせた。…

この若い美しい王子さまは誰なのか、たずねようとした瞬間、彼には稲妻のようにひらめいた。それは彼自身だったのである。

それは、月の子の金の瞳に映っている自分自身の姿だったのである。⁽⁴⁵⁾

このように、現実の世界（外界）ではどんなに望んでも得られなかったものが、月の子ファンタージェン国では望むだけで達成されるのである。そして、現実のバスチアンを苦しめていたのっぴきならぬ現実問題はそれによって当面

は解決したかのように思われた。しかし本当は、それは真の自分から目をそらし、真の自分から逃げていたにすぎなかった。そして、願望の達成・願望の成就には、それにふさわしい代償を伴っていたのである。

バスチアンは、美少年であることを享樂していた。ここには自分を賞賛してくれる人は一人もいないということは、苦にならなかった。逆に、一人でこの享樂にふけっていることのほうがうれしかった。今まで自分をあざ笑ってきた連中に賞賛されたところで、そんなものは何にもならない。あの連中のことを思うと、気の毒な気さえした。…だが、自分の美しさを楽しむ気持ちは、次第に変化していった。それが自分にはあたりまえになったのである。幸な気分が少なくなったのではない、ただ、そうでない自分などともとなかったかのように思いはじめたのである。…つまり望んでかなえられた美しさの代償として、かつては自分が肥っていたこと、エックス脚だったことを次第に忘れていったのである。…そして記憶が完全に消えてしまうと、自分は以前からずっとそうだったと思い、まさにそのせいで、美しくありたいという願望は消えうせた。というのは、今までずうっと美しかった者は、もはや美しくなりたいとは望まなくなるからだ。⁽⁴⁶⁾

これを解りやすく言えば次の通りである。月の子ファンタージェン国（内界）の成生は、バスチアンの願望・意志の実現に等しい。

バスチアンの願望・意志の実現は、現実のバスチアンの記憶（外界）の喪失に等しい。

それ故、月の子ファンタージェン（内界）の成生は、現実のバスチアンの記憶（外界）の喪失に等しい。

すなわち、バスチアンは現実の自分の記憶を一つ一つ月の子ファンタージェン国の中へ取り込みながら、その取り込んできた記憶を動機として、月の子ファンタージェン国を一つ一つ創造して行く。つまり、救世主バスチアンの創造行為の原動力は、現実のバスチアンの劣等感の心理的補償願望だったのである。それ故、バスチアンのファンタージェン国創造の業は、現実界のバスチアンのみじめな自己像の記憶がある限り継続し、その記憶が尽きはてれば、つまり補償願望が満たされてしまえば創造の業も停止し、月の子ファンタージェン国の成生は終る、つまり死滅する、ということになる。

バスチアンのこういう補償原理に従いながら、しばらくは新生月の子ファンタージェン国は力強く生長を続ける。結局、月の子ファンタージェンの全容は、現実のバスチアンの劣等感の記憶の全容に等しいのである。

こうして、東方の王子さまに生まれかわったバスチアンは、月の子から、「汝の 欲する ことを なせ」という銘が刻まれている黄金のメダル・アウリンが与えられる。アウリンはお光とも呼ばれている。また、お守りとしても機能する。このことは、人間の子供であるバスチアンに自由意志と万能の試練が与えられたことを意味している。バスチアンの自由意志の行使は、そのままファンタージェン国の創造の業となって現れる。バスチアンの創造の業の試行錯誤は、バスチアンの真の意志は何か、真の願望は何かを探索する旅なのである。

バスチアンのこの旅の行程は、二つに分けられなければならない。その一つは自己否定の旅、もう一つは自己肯定の旅である。自己否定はこの物語では現実の自己の記憶を忘れるという形で実行されている。バスチアンは現実の自己の記憶を忘れることによって自己を捨て、自己を捨てることによって自己を否定しているのである。自己を否定することによって、自己を他のものに取り換えて行くのである。しかし、忘れるべき記憶がなくなれば、自己を否定しようにも否定のしようがなくなる。この期におよんでなおかつ「汝の 欲する ことを なせ」という定言命法に従うならば、その時あるがままの自己が自己の意志によって変わるしかない。これと同時に真の主体性が回復される。「自己の意志によって自己を他のものと取り換える」ことは自己否定であり、「自己の意志によって自己が変わる」のは主体性の回復であり、自己肯定であり、自己変革である。自己否定から自己肯定への転換は、一種のコペルニクスの転換と言える。主体性の回復も、「他人を愛する」ということも、このコペルニクスの転換の達成によって初めて為すことができることなのである。とすれば、バスチアンの試行錯誤のつらい旅は、真の主体性回復への旅であると言うことができる。

I. 自己否定の旅 ― 心理的補償願望の旅

1. 強くありたい、勇敢でありたい

講釈はこれくらいにして、話をファンタージェン国にやってきたバスチアンに戻そう。

あたかも醜い青虫が脱皮して美しいアゲハ蝶に変身するように、バスチアンは醜い自分の記憶を忘れて、即ち現実の自分を否定して、正に絵に描いたように美しい王子さまの姿を取ったのである。これはバスチアンの最も強い自己否定願望を心理的に補償することによって達成されたものである。これが日常的なものになると、これであたりまえとなり、美しくなりたいということはもは

や願望の対象ではなくなる。そうすると、また別の欲望が生じてくる。バスチアンはもはや美しいだけでは満足できなくなり、強い少年になりたい、勇敢な少年になりたいという願望が胸の内にうごめき始める。バスチアンは思った。夜の森ペレリンが、いかに美しかろうと、ただ美しいだけではもの足りないなあ、それに、夜だけではやはりもの足りない。そうだ、ファンタージェン国でいちばん大きな砂漠に行くことにしよう、これこそ威張っていいことだ！こう思うや否や、夜の森ペレリンは夜が明け始めた。夜が白み始めると同時に、広大無辺で、深さの測り知れない森の木々も花々も枯れはじめ、枯れた木も花も色とりどりの砂となって崩れ落ち始めたのである。そして夜が明けきった時には、夜の森ペレリンは色とりどりの砂漠に変わっていた。バスチアンはこの砂漠に「色とりどりの砂漠ゴアブ」という名前を与える。広さという点では克服しようもない灼熱の「色とりどりの砂漠ゴアブ」をさまよっている内に、

人間界での自分に関する記憶の一部が、また消えた。かつては神経質で、ぐちゃぐちゃともいえるほどだったことを、彼はすっかり忘れてしまった。そして自分の粘り強さ、不屈の強さを誇らしく思い、満足した。するとはいくも次の欲望が頭をもたげた。

「僕にはもう怖いものは何もない。でも、僕にはまだ本当の勇気というものが無い。欠乏に耐えることができるのか、辛苦を克服するってのは、それは確かにたいしたことだ。でも大胆さとか勇気とか、これはまた別だ。すごい勇気が必要な正真正銘の冒険に出会いたいものだ。」⁽⁴⁷⁾

こう願った瞬間、ゴアブの大地に震動が走り、炎のように赤い砂丘の上に炎のように赤い巨大なライオンが姿を現したのである。このライオンは、「色とりどりの砂漠ゴアブ」の化身だった。バスチアンはそのライオンの必殺の力のこもったまなざしを真正面からまじろぎもせずを受け止め、そのライオンを屈服させる。バスチアンは、このライオンに「グラオーグラマーン」という名前を与え、その背に乗って広大無辺の「色とりどりの砂漠ゴアブ」を雄叫びをあげながら疾走する。そしてまた、彼はグラオーグラマーンととっ組み合い、つかみ合って遊ぶ。バスチアンはけっして負けることはなかった。

ある日、グラオーグラマーンはひと振りの剣をくわえてきて、バスチアンに差し出して言う。

「この剣に名前をつけて下さいますか。」

バスチアンはじっくりながめ考えて言った。

「シカンダ！」

この瞬間その剣はスルリとさやからぬけ、宙を舞って文字通りピッタリとバスチアンの手の中におさまった。

「鋼であろうと岩であろうと、ファンタージェンの国中でこれに刃向かえるものはありません。けれども、これを力づくで用いることはなりませぬ。今のようにひとりでに手の中にとびこんで来る時だけ、使ってもよいのです。——どんな危険があなた様に迫っていようとも、です。しかし、もしもご自身のご意志でこれをさやからひき抜かれるならば、あなた様はご自身とファンタージェン国に大きな災いをもたらすことになるでしょう。このことはけっしてお忘れになりませぬように。」

「うん、忘れない。」バスチアンは誓った。⁽⁴⁵⁾

シカンダは、バスチアンが自分で額に汗してつくり出したものでもないし、自から苦勞して身につけたものでもない。グラオーグラマーンから与えられたものである。しかしこれは、クラオーグラマーンを通してファンタージェン国の女帝「月の子」から授けられたものと見るべきである。そうすれば「月の子」はバスチアンに二つのものを授けたことになる。一つはアウリン。これはバスチアンに自由意思と願望成就能力を保証するものである。もう一つはこのシカンダ。これはある種の自由意思に禁止を課したものである。つまり、バスチアンに与えられている自由は無制約のものではないのである。それでは女帝「月の子」はバスチアンに何を禁止したのであろうか。それはシカンダがバスチアンに今後どんな作用を及ぼすかを見なければわからない。筆者の想像では、シカンダは背徳に対する警告者的なものなのであろう。徳（西洋の伝統では、愛、希望、信念、知恵、正義、勇氣、節制）にもとる行為に対しては、鞘からおのずからは抜けてこないという非協力によって拒否を示し、それでも力づくで引き抜いて背徳に走る暴挙に対しては災をもって罰するという、一種の絶対者・神なのであろう。ファンタージェン国の女帝「月の子」＝「おさな心の君」は、バスチアンに対しては依然として絶対者なのである。

今やバスチアンは、腰には魔法の剣シカンダをつりさげ、敏捷で強く、勇敢で鉄のように強い意志を持っている美少年の王子さまであった。そして、現実界（外界）でこれと対極をなしていた彼の全部を、すなわち本稿 198 ページで示しておいた①、②、③を全部忘れてしまっていた。今の彼にとっては、自分自身が身につけるべき資質は、これ以上望むべきものは何もなかった。初めのうちは、彼は完全無欠と思われる自分自身にただただ満足であった。

2. 仲間が欲しい 賞賛されたい 名誉を勝ち取りたい

こうしている内に、バスチアンに徐々に新しい欲望、社会的な欲望が芽ばえてくる。彼に欲求が芽ばえれば、彼のその欲求を満たし実現するために最もふさわしい状況が、彼の行く手に出現する。このファンタージェン国ではいつもそうなっているのである。

今や彼には恐ろしいものはなに一つなかったのだ、…新しい願望が彼の心の中に徐々に明確な姿をとり始めていた。それは、これ以上は一人ではいたくない、という願望だった。…彼は他の人の前で自分の能力を見せびらかしたかったのだ。賞賛され、名誉を勝ち取りたかったのだ。⁽⁴⁹⁾

こうして彼は意を決して、グラオーグラマーンに別れを告げ、「千の扉の寺」の中へあゆみ出して行く。「千の扉の寺」とは、彼の混沌たる欲望を意味する。彼はまだ漠然と仲間が欲しいと思っただけで、自分が求めている相手は誰なのかをはっきりとは意識していなかったからである。ドアを押して通りぬければ次の六角形の部屋、その部屋のドアを押し開けて通りぬければまた次の六角形の部屋、どの部屋もみんな異なっていたけれども、行けど行けど、どこまで行っても「千の扉の寺」からの出口はなかった。ついに左側の扉が白い真珠貝で、右側の扉が黒檀で出来ている緑がかった光で満たされている部屋に入った時、バスチアンは自分が求めている友がはっきりわかった。彼が求めている友とは、アトレューユとアトレューユの従者「幸の竜フッフル」だったのだ。それでようやく「千の扉の寺」を脱出することができたのである。出るとそこは森の中であつた。その森の中をさまよっていると、ルン国の姫オグラマール、この姫君につきそう勇士ヒンレック、後からこの二人に加わったという勇士ヒクリオン、ヒスバルト、ヒドルン、合計この五人の旅の騎士団と出会う。この情景は、アーサー王の伝説を暗示している。アーサー王の伝説は、キリスト教をテーマとしている点で、現代のドイツ人と文化を共有しているものであるし、何と云ってもドイツ人にとってはこの伝説は地元の伝説なのである。アーサー王と彼の円卓の騎士団の物語を思い描くだけで、ドイツの子供たちは心おどりと、血がさわぎ、あるいはうっとり空想の世界に思いひたることであろう。

彼らの話によると、月の子ファンタージェン国の救世主であられるバスチアンという名のお方は、ただ今行方不明で、そのお方に万一のことがあってはならぬということで、三人の搜索隊を結成することになった、というのである。この三人はファンタージェン国で最も強い者でなければならない、その勇士を選抜するため、月の子ファンタージェン国で最も美しい銀細工の都アマルガン

トで競技大会が催される、開催主は銀翁ケルコバート、審判長にして搜索隊長は緑の肌族の少年アトレユだ、というのである。彼らは、この競技大会に参加するため、ケルコバートへ行く途中であるという。バスチアンにとっては願ってもない幸、当面は自分の名も身分もふせてこの五人に加わって旅を続ける。バスチアンは、彼らの荷ラバ「イハ」の背に乗ってケルコバートに入る。余談ながらこの情景も、イエス・キリストのイエルサレム入城の情景を連想させる。

この競技大会で勝ち残ったのはヒスバルトだった。そこでバスチアンはヒスバルトに挑戦し、魔法の剣シカンダの助けによって彼を完膚なきまでにやっつけて優勝者となり、審判長アトレユの祝福を受ける。こうしてバスチアンは最も理想的な状況の中でアトレユとの再会(?)をはたし、最良の友を得る。それと同時に、皆の目の前で自分こそ「救世主」バスチアン・バルタザール・ブックスであることを名のり、ファンタージェン国のすべての勇士たちとアマルガントの全市民の熱狂の中で、友人と賞賛と名誉を勝ち取ったのである。その晩、バスチアンとアトレユ、フッフールとケルコバートには、ファンタージェン国の建国以来最も豪華な祝宴が捧げられた。

その夜、バスチアンは初めてアトレユと同室で休む。そして、「月の子」と会ってアウリンを拝領したこと、グラオーグラマーンの背にまたがり色とりどりの砂漠ゴアブを疾駆したことなどを語って聞かせる。しかし、バスチアンの期待に反して、アトレユは冷淡とも受けとれる程冷静で、手ばなしで感心はしてくれなかった。とにかくバスチアンは、アトレユに無条件に尊敬してもらいたかったのだ。それに、後になるとますます、アトレユはバスチアンに対して忠告者ぶった態度をとるようになったのである。アトレユのこういう態度は、今はアウリンを待っているバスチアンにとっては侮辱とさえ受け取れたのである。バスチアンのこの心のわだかまりが、後にこの両者に、そしてファンタージェン国に最大の災いをもたらすことになる。とにかくアトレユは他の誰よりもバスチアンの身を案じている真の友人であったのだが、これはまた別の話、後に語ることになるであろう。

話をバスチアンが友人アトレユとの出会いをはたした競技大会の栄光の日の晩にもどす。バスチアンはとにかくアトレユに無条件に賞賛して欲しかったのだ。そうでなければ、日頃学校で級友たちからさんざん馬鹿にされ、さげすまれいじめられている現実に対する心理的補償が実現されないのである。眠りぎわ、バスチアンは思案をめぐらす。

それは何か、ファンタージェン国中の誰にもできないこと、このおしる

を持っていてもできないことでなくてはいけない。

ついによい考えを思いついた、物語をつくることだ！⁽⁵⁰⁾

これこそはバスチアンが誰にも負けない彼の特技だった。この才能を示す機会は最速その翌日、訪れる。銀翁ケルコバートの話によると、アマルガントの住人は古来より全員歌人であり、語り部であるという。それで今日は、バスチアンをおもてなしするために、バスチアンを招待してアマルガントの語り部たちによる吟詠会を催すというのだ。彼らの歌も物語もそれはそれはすばらしいものだった。出来れば、バスチアンにも一つ何か物語を語って欲しいと言うのである。バスチアンは銀翁の願いに応じて『アマルガント図書館の物語』という物語を語る。それは、アマルガントの町の起源の秘密の物語だった。昔々、狩人クインは森で、角の先に光る石のついている一角獣を見つけ、その一角獣をしとめて光る石を持ち帰った。このたたりで、アマルガントには子宝にめぐまれなくなり、絶滅の危機に瀕した。この危機からアマルガントを救うために、クインは南のお告げ所に使者を出した。その使者が帰ってきた時は、次の世代のアクイルとムクアの二人しか残っていなかった。ウユララのお告げによれば、もしアマルガントの町が、ファンタージェン国で最も醜い常泣虫アッハライの力によって、ファンタージェン国で最も美しい町に作り変えられるならば、アマルガントは絶滅の危機から救われるであろう、ということであった。そこでアクイルとムクアはアッハライを探しに出かけ、地下深くに住んでいるアッハライをようやく見つけ出し、協力をお願いした。アッハライは、この二人の子孫が全員歌人や語り部になるならば、という条件でこの夫婦の願いを聞き入れた。そういうわけでアマルガントの住人は昔から全員、歌人や語り部なのだという。そして、歴代歌人や語り部たちの作った歌や物語をおさめてあるのが「アマルガント図書館」だ、というのである。バスチアンのこの作り語に、銀翁はとても感激し、バスチアンの才能をほめたたえる。しかし、アトレーユはやはり心配そうにバスチアンをながめるだけだった。バスチアンは、この物語によって、本稿 198 ページの④も⑤も⑥も忘れてしまったのである。

3. 「偉大なる徳行の人」と呼ばれて尊敬されたい

バスチアンとイハ、アトレーユとフッフール、ヒクリオン、ヒスバルト、ヒドルンの一行は、銀翁ケルコバートに別れを告げ、また旅に出る。

その旅の途中、ファンタージェン国中のありとあらゆる種族から使者がやってきて、バスチアンの一行に加わる。それらの使者たちは、「アマルガント図書

館の物語」で示されたバスチアのすばらしい才能をうわさで聞き、自分たちにも自分たちの種族の秘密の物語を作ってくださいよう願うするために遣わされた使者たちだった。しかしその頃、バスチアの心の中にはまた別の願望が芽ばえていた。

バスチアは自分に言いきかせた。自分は怪物や怪獣の創造主としてこのファンタージェン国の物語の中へ入って来るつもりなんかなかったのだ。もし善意と無私の人として有名になれるのなら、もしすべての人々から輝かしい模範として仰がれ、「善人」と呼ばれ「偉大なる徳行の人」と尊敬されるなら、この方がはるかによかろう。そうだ、これこそ望むところだ。⁽⁵¹⁾

旅の途中、彼らは奥深い洞窟の中で夜を明かすことになった。その夜、洞窟の奥から無数のすすり泣きが聞こえてきた。それは、ファンタージェン国で最も醜い常泣き虫アッハライたちの泣き声だった。彼らはここで、醜くあることの存在の不幸をなげき、流す涙で地下の銀を洗い出し、こうして得られた銀でファンタージェン国で最も美しい銀の細工物を作り続けていたのである。

「どうしたら僕は、おまえたちを助けてやることができるのだろうか？」とバスチアは同情のあまり泣きだしそうになって言った。

「おお、偉大なる慈善者よ」アッハライたちは叫んだ。「アウリンの保持者よ、我々を救う力をお持ちのお方よ。――我らの願いはただ一つ、我々に別の姿を与えたまえ！」「わかった、安心しろ！」バスチアは言った。

「僕の望みで、おまえたちは今すぐ眠りこみ、あすの朝目をさました時にはおまえたちはそのおまえたちの皮を脱ぎすてて蝶になっているのだ。おまえたちはきれいな色のたのしい生きものになり、いつも笑いこけてばかりいて、楽しいことばかりになる。あすからはおまえたちの名前は常泣き虫アッハライではなく、のらくら常笑い虫シュラムッフエンだ。」⁽⁵²⁾

この代償も、アトレーユにはわかっていても、今のバスチアにはわかっていなかったが、かけがえのないものだった。後、バスチアはヨルのミンロードの絵の採掘坑で探し出した氷の中の父の肖像画をこのシュラムッフエンのために失うことになるのだ。しかし、それはまた別の話、後にふれることにする。

実は、月の子のファンタージェン国でのアトレーユの使命は、バスチアをファンタージェン国（内界）から現実界（外界）へ連れもどすことだったのである。この任務は、「おさな心の君」のファンタージェン国でのアトレーユの使命は、バスチアを現実界（外界）からファンタージェン国（内界）へと連れて来ることだったこと対をなしているのである。連れて来たから帰してやらな

ければならないのだ。そうでなければファンタージェン国もアトレーユもバスチアンも、何もかも、悪魔の環の中に閉じこめられてしまうのだ。創造的な楕円は形成されなくなるのだ。

もしバスチアンがファンタージェン国にいるうちに彼の現実界の記憶を全部なくしてしまうようなことになれば、バスチアンはもはや現実界にもどることができなくなる。アトレーユはファンタージェン国のこの道理をよく知っていて、彼は折にふれてこのことをバスチアンに言って聞かせ、注意を促す。しかし、今のバスチアンはアトレーユの警告を善意として真剣に受け取ることも、この道理を理解することもできない。本当はバスチアンは、あの悲惨な現実界へ戻りたくなんかないからだ。これがバスチアンの当面の真の願望だったから、バスチアンたちの旅はファンタージェン国の出口の方へ近づくはずはなく、逆にファンタージェン国の奥へ奥へと深く迷いこんで行くばかりだった。

4. 危険で、恐ろしい者になりたい

「バスチアン、」アトレーユは懇願するように言った。「向こうの世界に君の心を引き戻すものはないのかい？向こうの世界には君が好きなものはないのかい？君はお父さんのことは考えないのかい、お父さんはきっと君のことを心配して待っているよ。」

バスチアンは頭を横にふった。

「僕はそう思わない。お父さんは、むしろ、僕が居なくなっても喜んでくれると思うな。」

アトレーユはびっくりして友の顔を見た。

「君たちの話を聞いていると、僕がいなくなればいいと思っているみたいだよ。」

バスチアンは苦々しげに言った。…

「つまり、君たちは二人とも、どうしたら僕をできるだけ早くファンタージェンの国から追い出せるか、そればかり心配しているみたいだよ。」⁽⁵³⁾

こうしてバスチアンは、アトレーユに対する反目の念を深めて行く。そして、アトレーユが自分を、無邪気でお人好しで、保護を必要としているかよわい子供と見なしていると思い込み、それにはどうしてもがまんがなかった。

僕は無邪気でお人好しなんかじゃない！絶対にそうじゃない！僕は害のない者なんかじゃないんだぞ、今に目にもの見せてやるぞ！僕は危険な者でありたい！危険で恐ろしい者になりたい！誰もが用心しなければならな

いような者になりたい——もちろん、アトレーユもフッフールも用心しなければならぬ者になりたい！」⁽⁵⁴⁾

ついにバスチアンは邪道に迷いこんだのである。この頃、旅の行く手には性悪な女魔術師クサイーデが住む魔の城、ホローク城が現れた。女魔術師クサイーデは、バスチアンの邪心と迷いの心をそのまま具体化したものである。クサイーデはバスチアンに敗北したと見せかけて、下臣としての忠誠を誓い、バスチアンの心にとり入る。そしてバスチアンの心を操る。というか、バスチアンの邪まな願望の成就に最大の味方となる。

アウリンは、本来ファンタージェン国の存在であるアトレーユに対しては常に正しい作用をしていたのである。しかし、本来人間界の存在であるバスチアンに対しては、かならずしもいつも正しい作用をおよぼすとはかぎらず、時には邪な作用をおよぼすこともあることを見てとったアトレーユは、バスチアンに提案する。

「…だから僕は君に提案したいんだけどね、そのアウリンを僕にあずけて、僕に道案内をさせてくれないか。君のために僕が君の道を探してあげるから。これ、君、どう思う？」

「断る。」バスチアンは冷やかに言った。

「…君は本当は僕からアウリンを取りあげたいんだ。なぜ取りあげたいのか、その本当の理由を言ってやろうか。君は僕をうらやましく思っているからだよ。それだけさ。君たちは僕のことをまだ知らないんだ。もしも君たちが僕に今後もこんな具合につっかかってくれば、——今は善意で今1回だけ言うておくけどね——その時は思い知らせてやるからね。」⁽⁵⁵⁾

程なく破局はやってきた。

「だまれ！僕にかまわないでくれ！僕のやることなすこと君たちの気にいらぬなら、すきな方へ行くがいいさ！ひきとめはしない！どこへなりと行くがいい！おまえたちの顔なんか見たくもない！」

バスチアンは腕組みして、くるりとアトレーユに背を向けた。…バスチアンは二度とふり向かなかつたので、アトレーユもゆっくりと背を向けて、たち去った。フッフールもアトレーユの後からついて去って行った。

クサイーデはニヤッと笑った。それはけっしていい笑いではなかった。この瞬間、バスチアンの心の中からまた一つ記憶が消えた。彼は現実界では子供であったことを忘れたのだ。⁽⁵⁶⁾

こうしてバスチアンは、せつかく望んで得た友人を再び自分の意志で失った

のである。

5. ファンタージェン国最高の賢者になりたい

クサイーデは、バスチアンをファンタージェン国に留めおこうとする魔女である。それに対してアトレーユは、バスチアンを何とかしてファンタージェン国から脱出させ現実界へ送り出そうとする友人である。それ故、クサイーデとアトレーユは敵対関係にある。クサイーデは、巧みにバスチアンの心をくすぐってアトレーユに対する友情を完全に捨てさせようとする。

「おお、わが君さまを凌ぐ者は一人もいません。」クサイーデはささやいた。「ただし、わが君さまが賢くいらっしゃれば、でございます。危険は、わが君さまの心の中にあるのです。それ故、わが君さまをあの人からお守りするのが困難なのです。」「僕自身の心の中に——とはいったいどういう意味だ？」バスチアンは知りたがった。

「賢いということは、すべての物事に超然としていること、誰をも憎まず誰をも愛さないということでございます。それなのに、わが君さまは今なお友情にお心を痛めておいでです。…ですから何者かがわが君さまに危害を加えることもあり得るのです。」

「何者かが、とはいったい誰のことだ。」

…「緑の肌族の、生意気で無礼な少年のことです。わが君さま。」

「アトレーユ？」

「ええ、そしてあの恥知らずのフッフルも。」⁽⁵⁷⁾

ということがあってから、賢いということがバスチアンの頭にこびりついて離れない。そしてついに次のような心境に到るのである。

僕は今まで多くのことを経験してきた。不安を持ったり喜んだり、悲しんだり勝利感を味わったり、一つの望みがみたされると次の望みへ走り、一瞬も心が休まることはなかった。そのどれ一つとして、心に安らぎも満足も与えてはくれなかった。しかし、賢いということは、喜びも悩みも、不安も同情も、名誉欲も侮辱も、すべてを超越している、ということだ。賢いということはあらゆるものを超越し、人をも物をも憎んだり愛したりすることなく、他人の拒絶も好意もまったく平静に受けとめる、ということだ。本当に賢者である者は、何をどうするなんてことはなくなるのだ。そういう人には誰も手がとどかないし、手だしすることもできないのだ。そうだ、それこそは本当に望むにあたいすることだ！…僕は偉大な賢者で

ありたい！ファンタージェン国中で最も賢い賢者になりたい！⁽⁵⁸⁾

こういう思いにふけりながら、テントから真夜中の外に出ると、折も折丁度その時、6羽のふくろうがバスチアンを迎えにやってきたのである。星僧院ギーガムの三人の沈思黙考師が生涯かけて考えても解くことのできない疑問にお答えいただきたく、伏して御来駕を乞うというのである。

星僧院の大講堂に案内されると、一段高い石壇の上に三人の院長——ふくろうの頭をした予感の母ウシュトゥー、鷲の頭をした観照の父シルクリー、狐の頭をした伶俐の息子イージプー——が威厳に満ちて座って待ちかまえている。中央の座を占めていたシルクリーが静かに、しかし、力強い声で問う。

「いかなるかこれファンタージェン？」

「ファンタージェンとは、はてしない物語なり。」

次の日の問答はこうであった。

「ファンタージェンがはてしない物語ならば、その物語はいずこに書かれてありや？」

「あかがね色の絹にて装丁されたる本の中に。」

次の日の問答はこうであった。

「われらの世界ファンタージェンがはてしない物語であり、そのはてしない物語があかがね色の本の中にあるのならば、しからばその本はいずこにありや？」

「学校の物置部屋の中に。」

「おおいなる智者よ。」狐の頭をしたイージプーは言った。「われらは師のおおせられることの真理を疑うものではござりませぬ。なれどあえてお願い致したい。この真理をわれらの目にお見せ下されたし。」

「よろしかろう。」…

バスチアンは、おもむろにポケットに手を入れて、アマルガント図書館の扉にはめ込まれていた一角獣の先にあった光る石を取り出し、高くかかげて大声で叫んだ。

「リハスト ラー！」

その瞬間、目もくらむ閃光（悟り）が走った。あまりの明るさに満天の星空は光を失い、その奥の暗い宇宙が照らし出された。その空間は、黒ずんだがっしりした梁のある学校の物置部屋だった。

「おおいなる智者よ、」シルクリーが言った。「ただ今は悟りのひらめきをいただき、なんとお礼を申し上げてよいか、その言葉もござりませぬ。」…

バスチアンは、この夜を境に、自分がかつては学校へ通っていたという記憶一切を失った。あの物置部屋のことも、あのあかがね色の絹表紙の本のことさえも、彼の記憶から消えうせてしまった。そして、そもそもどうして自分はこのファンタージェン国へやってきたのかということさえも疑問に思うこともなくなった。⁽⁵⁹⁾

こうして彼は、198 ページの①から⑧までの自分の現実をすべて忘れてしまった。

6. 帝王になろうとする意志

バスチアンはもとの悲惨で苦しい現実界へは戻りたくなかった。なんとかしてファンタージェン国にとどまっていたかった。この願望は、バスチアンの旅路をおのずとファンタージェン国の中心へと、エルフェンバイン塔へと、もくれん宮へと向かわせた。この願望は、もくれん宮の主、月の子に会いたいという気持ちに変わり、ついには自らもくれん宮の玉座に座りたいという願望へと変貌して行ったのである。こうなるように、バスチアンの心を操り、段取りを整えたのは黒魔術師クサイーデである。否、黒魔術師クサイーデを操っていたのは、バスチアンだったのである。つまり、バスチアン自身の想念が黒魔術を操っていたのである。

初めのうちは、バスチアンの心にはまだゆらぎはあった。アトレーユとは仲たがいしてしまったけれども、今でも時には心をわって素直に話し合える友を欲しいと思うことはあった。そんな時、心に思う相手はやはりアトレーユとフッフルであった。でも今さら、自分から出向いて行くのは面子にかかわることで、やれなかった。ここでバスチアンはクサイーデから献上されたゲマルの帯を使用することを思いつく。この帯をしめると、姿が消えて他人からは見えなくなるのである。ゲマルの帯をしめてアトレーユのテントへ行くと、ちょうどその時、アトレーユとフッフルはひそひそと重大な相談をしているところであった。バスチアンにこれ以上アウリンを預けておけば、バスチアンはもとの現実界へ帰れなくなるし、ファンタージェンも死滅してしまうことになる。バスチアンが自ら手ばなす気がない以上、盗み取るしかない。もう一刻の猶予もない、今夜決行しよう。こんな相談しているところを、そばで聞いてしまったのである。

自分のテントに帰ったバスチアンは、直ちに三人の騎士ヒスバルト、ヒドルン、ヒクリオンを召集し、今夜このテントに泥棒が入るかもしれない、来たら捕えるよう命じて、見えない所で待っていることにする。二人が捕えられると

ころを見たくなかったから。案の定、二人は捕えられて縛られ、バスチアンの前に引きずってこられる。バスチアンは、この二人をこれまでの恩に免じて命だけは助け、追放する。こうしてクサイーデは、バスチアンの心の中にひそんでいた危険を取り除いたのである。そして、最後の仕上げに取りかかる。

…彼女はここで手の内にあるものの中で最も強力な手段を使わなければならなかった。それは、バスチアンが心の奥底でひそかに持っている願望をくすぐることだった。クサイーデはバスチアンのそばに座り、耳もとにささやいた。

「わが師、わが君、エルフェンバイン塔へのご入城はいつになさいますの？」

「わからない。」バスチアンは…言った。⁽⁶⁰⁾

バスチアンの意志が固まらない理由の一つは、エルフェンバイン塔のもくれん宮の中の玉座には、今はどなたもおられない、月の子はどこにもお見えにならない、という情報がもたらされていたからである。それは当然だ。バスチアンには全然わかっていないのだけれども、月の子＝おさな心の君は、今は黄金のメダル・アウリン・お守り・おひかりの形をとって、バスチアンの首にかかっているのだからである。バスチアンにはそれがわかっていなかったのである。

クサイーデはバスチアンをもう一押しする。

「…おさな心の君は、わが君さまに全能全権のおしるしをお与えになったではありませんか。おさな心の君は、ご自分のお国をわが君さまにおまかせになったのです。今やわが君さまが帝王おさな心の君におなりになるのです。それはわが君さまの当然の権利です。わが君さまは、このファンタージェン国へおいでになってこの国をお救いになったばかりではなく、はじめっからこの国をおつくりになったのもわが君さまなのです！…」⁽⁶¹⁾

ついにバスチアンは、今日からきっちり 77 日目に自らファンタージェン国の帝王おさな心の君の王座に即位するつもりである、と宣言したのである。ただちに全国におふれが出され、即位の祝典の準備はクサイーデによって着々と進められて行く。しかし、エルフェンバイン塔の中心の一番高い所にあるもくれん宮は、いかなる手段を講じても登ることも、中へ入ることも出来なかった。月の子も依然として姿を見せなかった。バスチアンはただむなしく待つだけだった。ついにバスチアンは思いつく。月の子を呼びよせればいいのか。月の子だって従うはずだ、と。バスチアンは、夜ごと、夜ふけまでただ座り、つぶやいた。

「月の子、来なさい！来なくちゃだめだ。僕の命令だ、来なさい！」そ

してバスチアンは月の子の瞳を思った。光り輝く宝物のように心の中に秘められていたあの瞳を。しかし月の子は来なかった。そして無理に呼びよせようとするたびに、彼の心の中で輝いていた瞳の記憶はうすれて行き、ついには彼の心の中はまっくら闇になった。⁽⁶²⁾

即位の式典は、クサイーデに取りしきられて挙行された。バスチアンの玉座は、エルフェンバイン塔を登って行ってもくれん宮にたどりついた所にある大門のところに据えられた。エルフェンバイン塔の頂上にあるもくれん宮は閉ざされたままだった。そのためバスチアンの玉座はこのもくれん宮のすぐ下の大門のところに設けられたのである。式典はきらびやかに進行し、各国からやって来た使節が一人一人順々にバスチアンの前に進み出て、拝謁している最中だった。反乱軍が押し寄せてきたという報がもたらされ式典は混乱に陥ったのである。反乱を起こしたのはアトレーユの率いる緑の肌族と、フッフルの竜族だった。戦闘はその日一日続いた。反乱軍はもくれん宮のふもとまで迫った。バスチアンの玉座は粉々に砕け散った。バスチアンは、もくれん宮のすぐ近くにめぐらされている城壁の上の通路でアトレーユと対決する。

アトレーユはバスチアンの胸に剣の切っ先を突きつけて言った。

「さあ、おしるしを渡したまえ。君自身のためなんだ。」

「裏切り者！…取れるものなら取ってみろ！…」

バスチアンはシカンダのつかに手をかけ、力まかせに引き抜いた。自らとび出して彼の手におさまったのではなく、自分の力でシカンダの剣をぬいてしまったのだ。その瞬間、恐ろしい響きが鳴りわたった。…それは、グラオーグラマーンが石になる時、すなわち、グラオーグラマーンが死ぬ時、彼が聞いたあの恐ろしいうめき声だった。そしてシカンダのきらめきも消えた。…バスチアンはアトレーユに切ってかかった。アトレーユは自分の剣でそれを防ごうとしたが、シカンダがその剣を砕き、アトレーユの胸を突いた。深い傷が口をあけ、血が吹き出した。アトレーユはよろめきながら後ずさりして、大門の狭間から墜落した。…バスチアンが気がつく、バスチアンの真白だったマントは夜のようにまっ黒になっていた。…

燃えたぎる山のように崩れ落ちて行くエルフェンバイン塔を、全員じっと見まもっていた。頂上のもくれん宮も燃えあがった。その時、もくれん宮の花びらがパッと開いた。しかし、そのもくれん宮の中はからだった。バスチアンにもそれがはっきりと見えた。

「これはアトレーユの仕業だ。ようし、地のはてまででも追ってやるぞ！」⁽⁶³⁾

しかし、これは女の黒魔術師クサイーデに対するアトレーユの勝利の戦だった。この意味で、バスチアンに対するアトレーユの勝利の戦いでもあった。何がともあれ、アトレーユは、バスチアンがファンタージェン国の帝王の座につくのを阻んだのだから。

Ⅱ. 自己肯定の旅

7. あるがままの自己で愛されたい

紅炎につつまれて燃え落ちたエルフェンバイン塔をまのあたりにして、バスチアンはもう見さかいがなくなっていた。クサイーデがつくり出したがらん洞の黒ブリキの馬を駆って、一人夜の闇の中を疾駆し続ける。途中、ブリキの馬はバラバラに分解してしまう。バスチアンは立ちあがって徒歩でさまよい続ける。夜が明けると町らしきものが見えてくる。そこは、もと帝王たちの町であった。バスチアンは、この町の案内人、猿のアーガックスになかば無理矢理にこの町の中へ引きずりこまれる。この町の住人はすべて、現実界からファンタージェン国にやってきて帝王になった者、あるいは、現実界への出口を見つけ出す前に記憶を全部使いはたした者だという。帝王になってしまえば、もう何も望まなくなるから、記憶を全部使いはたした者と同じになるという。また、何も望まなくなればアウリンは何の役にも立たなくなるから、そのとたん、アウリンはその人から消えてなくなるという。いずれにしても、この町の住人はすべてファンタージェンからの出口を見つける前に現実界の自分の記憶を完全に喪失してしまった人々、すなわち完全に自己否定しつくしてしまった人々なのである。ある者は、鏡にせっけんを塗ってかみそりをあて続け、ある者は、シャボン玉に切手をはろうとし続け、ある者はさいころを振り続けている。彼らは言葉さえも忘れてしまっていて、無言でただただ無意味なことをやり続けている者ばかりであった。これが帝王になりあがった者たちのなれのはてだったのである。この馬鹿馬鹿しさ、この無意味の集合をまのあたりに見せつけられて、今やっとバスチアンは、アトレーユが彼に命をかけて教えようとしていたことを理解したのである。

「アーガックス、教えてくれ、僕はどうすればいいのだろうか？」

「あんたをあんたの世界につれもどしてくれる望みを一つ、見つけることさ。」⁽⁶¹⁾

バスチアンは、ほうほうの体でこのもと帝王たちの町をぬけ出し、また荒野をさまよう。その途中で、腰から魔法の剣シカンダをはずして、二度と過ちを

犯さないように砂の中深く埋めてしまう。

バスチアンは、ファンタージェン国を二分している大洋、霧の海スカイダンの岸辺の港町イスカールにたどりつく。イスカールの住人は、イスカールナリと呼ばれていた。バスチアンはイスカールナリに頼んで霧の海スカイダン渡る船に乗せてもらう。しかし、この船がどこにたどりつくのか、イスカールナリたちにもわからないという。彼らの船には帆も櫂もスクリューもない。不思議なことに彼らの船は、彼らの想念を動力として進むのである。彼らと一緒に航海してわかったことは、彼らには共同性があるだけで一人一人の個性はないのだ。そして彼らの共同性には、和合があるだけで愛はなかった。彼らと一緒に航海しているうちにバスチアンは次のような心境に至った。

バスチアンはもはや最も偉大なものでありたいとも、最も強いものでありたいとも、最も賢いものでありたいとも思わなかった。今や彼の憧れは、愛されるということだった。善良であれ邪悪であれ、美しかろうが醜かろうが、賢かろうと、おろかであろうと、すべての欠点を含めて――否むしろ欠点がある故に、ありのままの自分を愛されたかった。

しかし、あるがままの自分はどうだったのだろう。彼にはもうそれがわからなくなっていた。ファンタージェン国へ来てたくさんの能力や権力を手に入れて、その手に入れたものにうずもれて自分自身を見つけ出すことができなくなっていたのである。⁽⁶⁵⁾

ようやく船は対岸にたどり着いた。そこは色とりどりのバラが咲き競っているバラの森であった。小径をたどって行くと、「変わる家」という表札のついている家にたどりついた。その家の中から、温かいきれいな声で歌っている女の人の歌声が聞こえてくる。

百年もの間、私たちはあなたを待っていたのよ。いとしいお客さま。…
あなたが探し求めているものは何でも用意ができてますよ。
やすらぎも慰めも。

あなたがよい人であっても悪い人であっても、あるがままでいいのよ。
偉大なる主よ、再び小さくおなり！

さあ、あかちゃんになって入っておいで！⁽⁶⁶⁾

この歌を歌っているのは、この「変わる家」の女主人アイウオーラおばさまであった。この人を一目見たとたん、バスチアンは両手を広げて駆け寄って行って、「ママ！ママ！」と呼びたい衝動にかられた。バスチアンは母胎の中へ帰ったのだ。「変わる家」というのは母胎のことなのである。彼はここでアイウオー

ラおばさまの胎内で胎児からやりなおし、新たなる誕生をはたさなければならぬのである。とは言え、これは人格としての誕生のことではあるが。

余談ながらここで少し先へさかのぼって考えれば、エルフェンバイン塔での戦いで敗北し、戦死したのは、アトレーユではなくバスチアンだったのだ。ファンタージェン国を二分している霧の海スカイダンを渡ったということは、日本流に言えば三途の河を渡ったと同じことだったのである。今やバスチアンはファンタージェン国の彼岸の世界にたどりついたのだ。そして今、バスチアンはアイウオーラおばさまの胎内に入って、人格的な転生の準備をしているのだ。そして今、バスチアンのあるがままの自分のままで愛されたいという憧れは、ここでアイウオーラおばさまの母性愛によって満たされるのである。アイウオーラおばさまは、バスチアンのことなら何でも知っていた。バスチアンが忘れていたことまでもすべて知っていて、バスチアンにそれを語ってきかせた。彼がファンタージェンにやってきて、瀕死状態のおさな心の君に「月の子」という新しい名前を与えてファンタージェン国を救ったことも、その後バスチアンがファンタージェン国で体験したこともすべて、勿論エルフェンバイン塔の戦いのことも、昔帝王だった者たちの都にまよい込んだことも、すべて知っていて、バスチアンにすべてをありのまま語って聞かせて言った。

「ぼうやは、生命の水の湧き出る泉を見つければ帰れる人たちの一人なのよ。…」

「僕、生命の水、どこをさがせばいいの？」

「ファンタージェンの境よ。」アイウオーラおばさまは言った。

「だけど、ファンタージェンには、境がないのでしょうか？」バスチアンはたずねた。

「あるのよ。でもそれは、外にあるのではなく内にあるのよ。…」⁽⁶⁷⁾

変わる家での日々は過ぎ去っていった。…おばさまのやさしさや細やかな心くばりによって、バスチアンの心は満たされていった。そして、そういうものを求めていた気持ちが鎮まるのと同じだけ、バスチアンの心にはまったく別の種類の憧れが目覚め、大きくなっていった。それは彼がこれまで一度も感じたこともなく、またあらゆる点でこれまでの欲望とはちがう欲求であった。それは、自分自ら愛することができればいい、という憧れだった。自分にはそれができなかったのだ、ということに気づいたのである。これに気づいて、彼はがくぜんとし、悲しかった。しかし、その願望はど

んどん大きく強くなっていった。

ある晩、二人がいっしょに居た時、バスチアンはアイウオーラおばさまにそのことを話した。

「とうとう最後の願望を見つけたのね。」

おばさまは言った。「愛すること、これがあなたの真実の意志なのです。」⁽⁶⁸⁾

こうしてバスチアンはついに「汝の 欲する ことを なせ」というアウリンの本当の意味を見つけたのである。

自ら愛することができるようになりたいという願望は、バスチアンがファンタージェン国へやってきてから願望したいずれの願望（1～6の願望）とも本質的に異なる願望なのである。1から6までの願望はすべて利己的な動機から嫌悪すべき自己を否定することによって達成された願望であった。それに対して、愛することができるようになりたいという願望は、自己を肯定しつつ非利己的な動機から出てきた願望なのである。アイウオーラおばさまの胎内は、バスチアンが自己否定から自己肯定へ、利己的自我から非利己的自我へ、コペルニクスの転換をとげるために経なければならない精神的発達過程だったのである。つまり、賢者になりたいとか帝王になりたいとかいう願望しか持っていなかった自我から、自ら他人を愛することができるようになりたいという願望を持っている自我へ成長するためには、正に生まれ変わる必要があったのである。

アイウオーラおばさまの胎内での生活も月満ちて、バスチアンはついに誕生の時をむかえたのである。この時、バスチアンの記憶に残っていたのはたった一つ、自分の名前だけだった。お父さんのこともお母さんのことも忘れていた。

「ぼうやの最後の望みが、ぼうやを導いてくれます。それをなくしてはだめよ！」⁽⁶⁹⁾

その翌朝、バスチアンが目を覚ますと、アイウオーラおばさまは目を閉じ、枯れ木同様の姿になっていた。その時、外へ通じる「変る家」の扉が開いた。バスチアンは外に出た。外は一夜のうちに冬になっていた。バスチアンは震えながら歩きだした。

8. 愛することができるようになりたい

バスチアンは雪原をさまよっているうちに、盲目の坑夫ヨルの小屋にたどりつく。ヨルのミンロード坑は、その「人間界の忘れられた夢」⁽⁷⁰⁾の採掘坑であった。

「人間界の忘れられた夢」は、ファンタージェン国の地下深くの雲母層の中に

絵となって蓄積されている。ここでエンデが言っている「夢」とは、願望とか憧れと同義であろう。⁽⁷¹⁾生命の泉への道をたずねるために立ちよったバスチアンに、ヨルは答える。

「…おまえは生命の水をさがしておる。おまえは、おまえの世界にもどるために、愛することができるようになりたいと望んでいる。愛する——言うのは簡単だ！生命の水はおまえにたずねるだろう、誰を、とな。つまり、ただ単に一般に愛することは不可能なのだ。でもおまえは、おまえの名前以外は全部忘れてしまっている。しかし、その問いに答えることができれば、生命の水を飲むことは許されないのだ。おまえを助けることができるのは、おまえが見つけ出す絵だけだ。その絵がおまえを泉へと導いてくれる。…」⁽⁷²⁾

バスチアンは、ヨルが採掘してきた雲母絵を全部見せてもらった。けれどもそこには見覚えのある絵は一枚もなかった。そこで、バスチアンもヨルと一緒にミンロードの坑内へ入って、自分も雲母絵を採掘することにする。ついにある日、自分で採掘してきた絵の中に彼の目をくぎづけにした絵に出会う。そこには、白いうわっぱりを着た一人の男がとじこめられていた。その男は、手には歯型を持っていた。その絵を眺めている内に、バスチアンの心の中に、この見知らぬ男への思慕が目覚めたのである。この思慕の情は、はるかかなたの沖あいから押し寄せてくる海の大潮のように、時々刻々とま近に迫ってきて巨大な波となって、バスチアンの心をのみ込んでしまったのである。この時、バスチアンは、覚えていた最後のもの、自分の名前を忘れてしまったのだ。

今や名前さえ失ってしまった少年は、一枚の雲母絵を大切にかかえて、ヨルのもとを辞して、生命の泉への旅に出る。途中、突然、のらくら道化蛾シュラムツフェンの大群に襲われる。彼らは、以前バスチアンの善意によって常泣虫アッハライが変身させてもらった者たちである。彼らは叫ぶ。

おれたちの親分になってくれ。おれたちに命令してくれ、おれたちは指図されたいのだ、と。

少年は答える。

それはできない。

シュラムツフェンたちは叫ぶ。

それならおれたちをもとの常泣虫アッハライにもどしてくれ、おれたちをこんな姿に変えたのはおまえさんじゃないか。アマルガントでは、涙の湖ムーフー湖は干あがり、銀細工もできなくなって困っているんだ。

少年は答える。それもできない、今ではもう何の力も持っていないのだ、と。

それならおれたちは、あんたをさらって行くよ。

シュラムッフェンたちは、名のない少年に襲いかかり、群がって宙に持ちあげようとする。少年は追い払おうとする。このどさくさの中で、名のない少年がだいじにかかえていた薄い雲母絵は粉々に砕けてしまう。もはや、この少年を生命の泉へ導いてくれるものは、何ひとつなくなってしまったのである。

この挿話は、慈善行為に対する疑問を投げかけたものとも受け取れるし、自分の劣等感の補償を実現したいという利己的動機から出た慈善行為に対する皮肉とも受け取れよう。

話をもとにもどそう。名前のない少年は雪原に泣き崩れる。泣いて、泣いて、泣く。涙でかすんだ目なごしを雪原の地平線に向けると、こちらへ近づいてくる人影が目に入る。それは、アトレーユと幸の竜フッフールであった。名前のない少年は無言でアトレーユの真正面に立った。アトレーユは立ったまま無言で、おだやかな心のこもったまなごしで少年を見つめていた。名前のない少年は、首からゆっくりとアウリンをはずし、アトレーユの前の雪の上においた。少年は目を閉じた。再び目を開けてみると、そこは黄金の蒼穹のドームの中であった。そのドームの中央に、巨大な白い蛇と黒い蛇が、互いに相手の尾をかみ合って楕円を成して横たわっていた。その楕円の中央には生命の泉が、力強く生命の水を沸きあがらせていた。巨大な2匹の蛇は、城壁のように横たわっていた。名前のない少年の目はその水に吸いよせられた。幸の竜フッフールは、その水の言葉を通訳して少年たちに伝える。

「くりかえし言っています。『飲め！飲め！汝の欲することをなせ！』と。…私たちの名前をたずねています。」

名前のない少年はだまったままだった。アトレーユは彼をじっと見ていたが、その手をとって叫んだ。

「バスチアン・バルタサル・ブックス！」⁽⁷³⁾

黒い巨大な蛇が、白い巨大な蛇の尾をくわえたまま頭をもたげた。巨大な門となった。名前のない少年とアトレーユとフッフールはその門をくぐって生命の泉の方へ進んで行った。美しい、強い、恐れを知らぬ英雄は、今は再び背の低い、肥っちょの、気の弱い少年になった。ファンタージェン国で得たものはすべて失っていた。

名前のない少年は水晶のように澄んだ水の中にとびこんだ。…彼は、渇きがすっかりおさまるまで、飲んで、飲んで、飲んだ。彼は頭のとっぺん

から足の先まで悦びでいっぱいだった。生きる悦びと、自分自身である悦びでいっぱいだった。その時彼は自分は誰なのか、自分の所属する世界はどこなのか、を再び知った。彼は新しく生まれ変わったのだ。ありのままの自分で生きようとする事は、最高にすばらしいことであった。…今や彼はさとした。世の中に悦びの形は何千何万もあるけれども、それらは根本においては一つ、愛することが出来るという悦びなのだ、ありのままの自分で生きようとする事と、愛することが出来ると言うこと、この二つは同じものなのだ、と。⁽⁷⁴⁾

別れの時は来た。

「アトレユ、アトレユ！僕はねえ、君このことは絶対に忘れないからね。」

「うん、バスチアン、そんなら君、ファンタージェンのことも忘れないよね。」

さき程入ってきた門と反対側に、今しも白い巨大な蛇が黒い巨大な蛇の尾をくわえて、頭を持ちあげた。それはアーチを描いて門になった。

バスチアンは大急ぎで両手で生命の水をすくった、そしてこの門に向かって走った。門の向こうは闇だった。バスチアンは、その闇の中へとび込んだ。——そして虚空の中へ落ちていった。

「お父さん！」と彼は叫んだ。「お父さん！——僕だよ——バスチアン——バルタザール——ブックスだよ！」（ここまでが緑色、内界）

すぐ続いて、次からはこの本の終りまで全部茶色で印刷されている。

「お父さん！」と彼は叫んだ。「お父さん！——僕だよ——バスチアン——バルタザール——ブックスだよ！」（茶色、外界）

まだそう叫んでいるうちに、バスチアンはどこを越えたのでもないのに、再び学校の物置部屋に居た。⁽⁷⁵⁾

こうして、物語の場面は第4場へと移っていく。それと同時に、第3の楕円は完結する。この第3の楕円の外延は、この物語の第3場、すなわち、バスチアンが真夜中12時すぎ眠りに陥ってから朝8時すぎ目を覚ますまでの話と一致する。つまり、第3の楕円は終始、心の中での（夢の中での）出来事だったのである。それ故、この第3の楕円は、次の第4場との関係で見れば、内界1極と化し、楕円であることを消滅する。そしてこの第3の楕円から変化した内界としての極が、次の第4の楕円の一つの中心となる。

第4の楕円

この物語の第4場は、バスチアンが朝8時すぎ、学校の物置部屋で目を覚ました所から始まる。その当日はお父さんと語りあった物語で、その翌日は古本屋の主人コレアンダー氏と語りあった物語である。両日とも、目を覚ましている間の出来事で、当然現実界すなわち外界での出来事の物語である。従って第4の楕円の一つの中心は、外界としての第4場である。そして、もう一つの中心は内界としての第3場である。では、この外界と内界との相互置き換え、相互関係性は、この第4場ではどのような形で実行されているのであろうか。

内界と外界との不可分の関係性は、第4場においては、従って第4の楕円においては、ファンタージェン（内界）を現実の生活（外界）の中へ取り込む形で構築される。この関係性は、第4場ではバスチアンと父親との関係と、バスチアンと古本屋の店主コレアンダー氏との関係とにおいて語られている。

まず、バスチアンと父親との関係から見て行くことにしよう。これを明確にするためには、バスチアンがファンタージェンへ行く以前のこの父子関係を見ておかなければならない。これはバスチアンの回想という形で告白されている。お母さんの死を思い出した時、お父さんと自分との関係を次のように回想している。

それからだった、父さんとバスチアンとの間が前とすっかり変わってしまったのは。外見はそうではなかった。バスチアンが欲しが物は何でも買ってくれた。三段ギアの自転車、電池で走る機関車…、でも、こんなものは本当のところ、どうでもよかったのだ。

以前は、お父さんがよくふざけたのをバスチアンは覚えていた。話をしてくれたり、本を読んでくれたりもした。ところがあの日以来、そんなことはなくなってしまったのだ。いまでは、お父さんと話をすることもできなくなっていた。お父さんの周りには目に見えない壁ができ、それを通りぬけることは誰にもできなかった。叱りもせず、賞めもしてくれない。バスチアンが落第した時でさえお父さんは何も言わなかった。あのうつろな悲しそうな表情で見つめていただけだった。バスチアンは、自分なんかはまるで居ないかのような気持ちだった。…どうしてお父さんは僕を相手にしてくれないのだろう？ どうしてお父さんは用のある時しか口をきいてくれないのだろう？⁽⁷⁶⁾

つまり、バスチアンがファンタージェンの世界（内界）へ行く以前には、この父子関係は冷えきった心理的断絶状態にあったのである。その後、バスチア

ンは、ファンタージェンの世界へ行って、真の意志は何かを探索する旅をし、数々の失敗を重ねたあげく、最終的にありのままの自分で生きようとする意志と愛することができるようになりたいという願望に到達したのである。ファンタージェンの世界で見つけたこの真の意志と真の願望は、ファンタージェンの世界だけの話にすぎなかったのだろうか。これを確かめるためには、彼がファンタージェンから目を覚まして家に帰ってきてからの彼の生きかたを見なければならぬ。彼が家に帰った時の様子から見てみよう。

お父さんは両腕を広げた。バスチアンはその両腕の中へ飛び込んで行った。お父さんはバスチアンをかかえあげ、そのまま家の中へつれて行った。

「バスチアン、バスチアン、」お父さんは繰り返し言った「わたしのかわいいバスチアン、大事な大事なバスチアン、いったいどこへ行っていったんだ？何をしてたんだ？…お父さんは一日中、一晩中、おまえを探してたんだぞ、バスチアン。警察にもたのんだ。最悪のことまで心配したからな。バスチアン、いったいどうしたんだ？ お父さんは心配で心配で、気でも狂いそうだったよ。どこに居たんだ？」そこでバスチアンは、体験した出来事を話し始めた。…お父さんはじいっと耳を傾けていた。そんなに熱心に聞いてくれたことなどいままではなかったことだ。お父さんは、バスチアンが言うことをよく理解してくれた。…台所はもう暗くなっていた。…バスチアンは立って、電灯のスイッチをひねった。そして、今までに見たことのないのを見た。お父さんの目に涙がうかんでいたのである。やっぱりお父さんに生命の水を持ってきてあげることができたんだ、とバスチアンは思った。

お父さんはだまったままバスチアンを引きよせ、膝の上にのせて固く固くだきしめた。二人は互いの背中をさすりあっていた。長い間そうしていた後、お父さんは深いため息をついて、バスチアンの顔をじいっと見つめ、にっこりした。お父さんのこんな幸せそうな笑顔を見るのは初めてだった。

「さあ、これからは何もかも変わるぞ。」お父さんは今までとは全然ちがう声で言った。「おまえもそう思うだろ。」

バスチアンはうなずいた。胸がいっぱいで一言も言えなかった。⁽⁷⁷⁾

こうして、バスチアンがファンタージェンの中で到達した「ありのままの自分を愛して欲しい」、「ありのままの自分であろう」、「愛することができるようになりたい」という彼の真の意志・真の願望は、見事に現実のものとなって、現実の生活の中に生きているのである。

次に、バスチアンと古書店の主人コレアンダーさんとの関係を見て見よう。これは、その次の日の話である。バスチアンは、『はてしない物語』という本を盗んだことを詫びるために、コレアンダーさんの所へ行く、と自分から言い出したのである。しかも、お父さんについて来てもらわなくてもいい、自分一人で行く、と言い出したのである。これ自体、以前のバスチアンには考えられないことであった。

「これは僕のことだもの。自分でするよ。今すぐにするのが一番いいと思う。」…「変わったなあ。」お父さんは言った。⁽⁷⁸⁾

しかし、以前のバスチアンにとっては、コレアンダーさんは、噛みつき癖のあるブルドックのように思える程恐ろしいおじさんだったのである。ましてや今回は、本を盗んだことのお詫びに行こう、というのだから、益々そうだ。

コレアンダーさんの古本屋の前まで来ると、バスチアンの勇気はやはりまたしぼんでしまった。飾り文字の書いてあるガラス戸から店の中をのぞいてみると、コレアンダーさんは今はちょうど一人の客の相手をしているところだった。バスチアンはその人が出て行くまで待とうと思った。そしてその古本屋の前を行ったり、来たりしていた。また雪が降ってきた。とうとう、その客は店から出て行った。

「今だ！」バスチアンは命令した。

色の砂漠ゴアブでグラオーグラマーンにたち向かって行ったあの時のことを思い浮かべ、思いきって取っ手を押した。⁽⁷⁹⁾

このように、月の子・ファンタージェン国（内界）での「救世主」としての体験は、確実に現実の世界（外界）でも生かされているのである。そしてこのように内界と外界との不可分な関係性を確立することによって、第4の楕円は成生するのである。

第5の楕円

バスチアンと級友たちとの関係およびバスチアンと学校の先生との関係において、すなわち学校生活の場（外界）において、バスチアンのファンタージェン国（内界）での体験が、どういう具合に転写されていくかということについては、この物語では具体的には何も触れられていない。なにしろ、バスチアンがコレアンダーさんのところへお詫びに行って、いろいろ意気投合し合って店を出てきた時には、この『はてしない物語』はすでに428ページに入っていたのである。いかに長編童話 »Märchen-Roman« とは言え、これ以上の話は、「こ

れはまた別な物語、これはまた別の時に話すことにしよう」ということにせざるを得ないのであろう。

とにかく、バスチアンのファンタージェンの中での体験がバスチアンの学校生活の中でどういう形で転写されて行くかについては、具体的には何も語られてはいない。しかし、その方向性は明白である。それはバスチアンと父親との関係のごとし、バスチアンとコレアンダーさんとの関係のごとし、と考えるべきである。つまり、ファンタージェン（内界）の中での体験は、最終的にはことごとく現実生活（外界）の中へ取り込まれ、現実生活の中へ転写されて行くはずである。この方向性をつきつめて行けば、第4の楕円は今のところは楕円として存在しているけれども、限りなく外界1極へ収斂して行くはずである。結論を先取りして言えば、第4の楕円と第2の楕円との間に客観的な不可分の関係性が発生すると同時に、第4の楕円は消滅して外界1極と化し、第2の楕円は消滅して内界1極と化す。そしてこの外界と内界が新たな楕円の二つの中心となって、第5の楕円が成生する。それ故、第5の楕円が成立するか否かは、第4の楕円と第2の楕円との間に客観的で不可分の関係があるか否かにかかっている。この点を検討してみよう。

このことを誤りなく見定めるためには、ファンタージェン（内界）の中での出来事が現実界（外界）の中へ入ってきた時、つまり内界と外界とが客観的に関係するに到った場合、ファンタージェンの中の物事、出来事がどういう姿で現れてくるのかを知っておかなければならない。

話は、おさな心の君のファンタージェン国での物語にもどらなければならない。アトレーユが、おさな心の君の病を癒す方法を知っている人を探し出すための「おいなる探索の旅」に出ると同時に、闇の中から、アトレーユを殺し、おさな心の君の転生を阻む任務を与えられた人狼グモルクが発生し、アトレーユを追跡し始めていたのである。しかし、グモルクは、闇の奥方ガヤにたぶらかされて油断し、絶対断ち切ることができない魔の鎖につながれて置き去りにされ、餓死するのを待つばかりであった。そのみか、まじかまで周囲360°、虚無がおし寄せていた。こういう状況の中で、ついにアトレーユはグモルクと遭遇したのである。死を脱れる術がないことを知った人狼グモルクは言う。

「今、ちょうど今、虚無が環になってこの町をとり囲んでしまったところだ。おまえはもう逃げられねえ。囚われの身よ。」

「いっしょに死ぬんだな。」アトレーユは言った。

「そりゃそうだがなあ。」グモルクは答えた。「死に方がまったくちがうの

さ。ばかなおちびさんよ。だってなあ、おれは虚無がここに押し寄せてくる前に死ぬ。だがおまえはそれにのみ込まれるんだからなあ。これはおおちがいだぜ。その前に死んじまえば、そいつの話はそれで終りになるが、おまえのはずうっとはてしなく続くんだぞ。虚偽としてよ。」⁽⁸⁰⁾

バスチアンにはこれの意味がわからなかった。後に、おさな心の君にお目どおりがかなった時、たずねる。

「それにしても、人狼グモルクの言ったことは本当なのでしょうか。虚無にのみ込まれて亡ぼされたファンタージェンの生き物は人間界に行って虚無になるということは。」アトレュは知りたがった。「それは本当です。すべての虚偽は、かつてはファンタージェンの生き物だったのです。…けれども、グモルクがそなたに語ったことは真理の半面でしかありません。…ファンタージェンと人間界を越える道は二つ、正しい道と誤った道とがあるのです。ファンタージェンの生き物が恐ろしい方法でむりやりむこうに引きずられて行くのは、誤った道。けれども、人の子たちが私たちの世界にやってくるのは、正しい道なのです。ここに来た人の子たちはみんな、この国でしかできない経験をして、それまでとはちがう人間になって、もとの世界へ帰って行きました。…」⁽⁸¹⁾

要点をおさえれば、ファンタージェンの中の存在が現実界にやって来れば、それは虚偽という姿をとる、ということなのである。これがエンデの基本的な考え方である。この点をおさえたらうえで第4場へもどろう。

前にもふれた通り、バスチアンは朝8時すぎ、学校の物置部屋の中で目を覚ましたのである。家へ帰り仕度する。

かばんの革ひもを肩にかけて、あの時盗んだ本、そこから何もかもが始まったあの本を探した。彼は、その本をあの愛想の悪いコレアンダーさんに返しに行こうと決心したのである。盗みの罪で罰を受けようと、訴えられようと、それとももっとひどい目にあおうと、バスチアンのようにあれほどの冒険をしてきた者には恐れることはほとんどなかった。ところがその本はなかった。

バスチアンは探しまくった。毛布をひっくり返してみたり、物置のすみずみまで探しまくったけれども、無駄だった。はてしない物語は、跡かたもなく消えていた。⁽⁸²⁾

探し方が悪いのだろうと、思われるかも知れない。しかし、である。とにかくバスチアンはコレアンダーさんの所へお詫びに行ったのである。

「僕——」バスチアンはつかえながら言い始めた。「僕、おじさんの本を盗んだんです。僕、それを返そうと思ったんだけど、なくしたんです。——というより、とにかくなくなっちゃったんです。」

「どんな本だね。」

「この前僕がここに来た時、おじさんが読んでいた本です。僕それを持っていっちゃったんです。電話がかかってきておじさんが奥へひっこんでいった時、その本はこの椅子の上においてありました。僕、その本を持っていっちゃったんです。」

「ふうーん、しかし、わたしの店じゃ、なくなった本なんかないよ。いったいそれはどんな本だったのかね。」

「『はてしない物語』という本です。表紙はあかがね色の絹ばりで、こんなふうに動かすとかすかに光るんです。そこには2匹の蛇が描いてあって、1匹は明るい感じ、1匹は暗い感じで、互いに尾を咬んでいるのです。中は2色刷りでした。…」

「かなり妙な話だなあ。」とコレアンダーさんは言った。「そんな本は私は持っていないよ。だからおまえはその本を私の店から盗んだのではない。…」⁽⁸³⁾ バスチアンが、更にその本の内容のことまでふれて説明し出すと、コレアンダーさんはことのほかバスチアンの話に興味を示し、バスチアンが彼の体験を話し終るまでには2時間以上もかかったのに、熱心に耳を傾けてくれたのである。実はコレアンダーさんも、ファンタージェンへ行ったことがある人だったのである。話を聞き終わってコレアンダーさんは、バスチアンの言うことをすっかり信じてくれて次のように言う。

「確かなことは一つだ、おまえはその本を私から盗んだのではない。なぜなら、その本は私のものではない、おまえのものでもない、他の誰のものでもない。私がまちがっていなければ、その本はファンタージェンから出てきたものなのだ。…」⁽⁸⁴⁾

コレアンダーさんはまちがっていなかった。彼の考えは正解である。バスチアンは、登校の途中このコレアンダーさんの店に立ち寄って、『はてしない物語』(B本)を盗んで(第1場)、それを学校の物置部屋の中で読みふけっているうちに(第2場)、ファンタージェンの中に入って行って(第3場)、そしてきのう帰ってきて、今ここに居る(第4場)のである。当然、バスチアンがコレアンダーさんに返そうと思っている本は、バスチアンが盗んだと思い込んでいるB本である。ここで、第2の楕円の外延である第1場と第2場、それから第2

場をしめくくる「さすらい山の古老」の話を思い出してもらわなければならない。おさな心の君のたつての願いによってファンタージェンの記憶である「さすらい山の古老」が語りなおしたファンタージェンの中には、第2場のみならず、バスチアンの強固な思い込みに反して、第1場も含まれていたのである。ということは、バスチアンがコレアンダーさんの店から『はてしない物語』（B本）を盗んだということも実はファンタージェンの中での出来事だったのである。当然『はてしない物語』（B本）もファンタージェンの中の物である。

ファンタージェンの中の物が人間界、すなわち、今、ここ、コレアンダー古書店の中へ出てきたらそれはどうなるか。その正解は本稿 251 ページに書いてある。すなわち、おさな心の君の言っている通り、「虚偽」になるのである。それ故、人間界の今、ここ、コレアンダー古書店の現実の世界では、バスチアンが『はてしない物語』（B本）を盗んだということは虚偽である。だから、コレアンダーさんはバスチアンに、「おまえは、その本（B本）を私から盗んだのではない。」と断言したのである。

また、『はてしない物語』（B本）の存在それ自体ファンタージェンの中での存在だったのである。それ故、人間界であるバスチアンが目覚めた学校の物置部屋の中では『はてしない物語』（B本）の存在自体が虚偽なのである。すなわち、『はてしない物語』B本は現実の人間界では存在しない本なのである。だから、バスチアンがいくら探しても、それはなかったのである。

以上によって、第2の楕円と第4の楕円とは、理路整然と客観的に不可分に関係していることは証明された。それ故に、第5の楕円は客観的に存在する。

そして、我々が現に手に持って読んでいる『はてしない物語』（A本）は、この第5の楕円の外延の内部におさまっているのである。

結論

話を再び『はてしない物語』（A本）の表紙にもどそう。本稿の筆者は、表紙の少し暗い感じの赤から不完全な円を読み出した。不完全な円からは楕円を読み取った。楕円とは、二つの中心を持つ円である。この『はてしない物語』においては、この楕円を形成する一つの中心は外界（明の部分）であり、もう一つの中心は内界（暗の部分）である。外界は現実の人間の生活の場としての世界であり、内界はファンタージェン＝空想＝夢想の中の世界である。この表紙に刻印されている楕円は第5の楕円である。この楕円の中に刻印されている『はてしない物語』という標題は、A本としての『はてしない物語』である。この

楕円の右半周を形成している明の領域の蛇＝明の原理の蛇＝黒蛇（ただし、この蛇の模様は明）は外界＝現実の生活世界を現し、左半分を形成している暗の領域の蛇＝暗の原理の蛇＝白蛇（ただし、この蛇の模様は暗）は内界＝ファンタジーの世界を現している。黒蛇の頭が白蛇の尾をくわえている所は、現実の世界からファンタジーの世界への入口であり、物語の中では、「月の子！僕行きます！」⁽⁸⁵⁾と言っている所に相当する。この言葉の精神は自由意志である。白蛇の頭が黒蛇の尾をくわえている所は、ファンタジーの世界から現実の生活世界への出口であり、この物語では「お父さん！お父さん！——僕だよ！——バスチアン——バルタザール——ブックスだよ！」⁽⁸⁶⁾と言っている所に相当する。この言葉の精神は自己肯定＝愛である。この観点から言えば、この楕円の二つの中心は、自由意志と自己肯定＝愛であり、この物語は、自由意志と自己肯定（この裏面としての自己否定）＝愛することができるという能力（この裏面としての愛することができないという自我）との二つの原理の不可分の相互作用によってくり広げられる物語である、とも言える。

人間が自由意志によってファンタジーの世界へ入って行き、空想行為をすること（ファンタジー）によって、滅亡に瀕していたファンタジーの世界は転生・再生する。こうして自分の自由意志で創始したファンタジーの世界で、自分の自由意志によって精神的遍歴をする。その遍歴の結果、自己肯定の境地に到達し、他人を愛する能力を獲得する。そして、この能力をおみやげにしてファンタジーの世界から現実の世界へ帰ってくる。この物語のこの趣旨からすれば、表紙の楕円を形成している2匹の蛇は、癒しを象徴している。そして、この二匹の蛇に囲まれて守られている生命の泉は、とりもなおさずこの『はてしない物語』そのものなのである。とすれば、この蛇は、ギリシア神話の医神アスクレーピオスの聖獣としての蛇と見るのが一番妥当であろう。この推理を裏づけるために、コレアンダーさんがバスチアンに語った言葉を引用しておこう。これは、バスチアンが彼の店へ本を盗んだことのお詫びに行った時、コレアンダーさんがバスチアンに語った言葉である。

「絶対にファンタジーへ行けない人間もいる。」コレアンダーさんは言った。「行けるけれども、永遠に行きっぱなしになってしまう人間もいる。それから、少数だけど、ファンタジーへ行って、そこから再びもどってくる人間もいる。おまえのようにね。そういう人間が両方の世界をすこやかにするんだ。」⁽⁸⁷⁾

この言葉は、ミヒャエル・エンデ自身の意見として受けとめていいであろう。

とはいえ、エンデはこの『はてしない物語』に古代ギリシア神話ふうの隠し味をつけているだけでなく、複眼的な世界観に基づいて構想していることも確実であろう。読者たちをファンタージェンの世界の中へさそい込み、迷路をさまようようなスリルを味わわせるためには、子供たちが少しは知っていて親しみやすく興味を示しそうな情景を、例えば聖書の世界とか古代エジプト神話の世界とか、アーサー王の伝説の世界とかを思わせるような情景をちりばめておくことは効果的であろう。そのためか、この『はてしない物語』には、古代ギリシア神話の世界よりも、むしろキリスト教的な世界を連想させる場面がちょくちょく出てくるのである。バスチアンがもぐりこんだ学校の物置部屋においてある七枝の燭台、いわゆるメノラーは、言うまでもなくユダヤ教の法具である。晩になって暗くなってから真夜中まで、バスチアンはこのメノラーにろうそくをとめて『はてしない物語』(B本)を読みふけている。更に、月の子のファンタージェンでは、バスチアンは「七枝燭台の騎士」⁽⁸⁸⁾と呼ばれていたとも記されている。それやこれやは、旧約聖書を連想させる。

更に、おさな心の君を救うことのできる者は「人の子」とされている。「人の子」とは、四つの福音書の中でそれぞれ10箇所以上出てくる救世主イエス・キリストを指す呼び方である。そして、月の子ファンタージェンの創造の描写は、特にベレリンの森の描写は、ヨハネによる福音書を強く連想させる。とすれば、月の子のファンタージェンの世界は新約聖書に模したものであると言うことができよう。キリスト教的な世界観から蛇を考えれば、表紙に刻印されている蛇は、旧約聖書創世記の蛇(エデンの園の蛇)とも、出エジプト記の蛇、すなわちモーゼの杖＝神ヤーヴェの存在・力の証としての蛇とも見ることも可能であろう。

また、おさな心の君のファンタージェン国におけるアトレユの任務、すなわち、おさな心の君の病を癒すことのできる者を探し出すという「おおいなる探索」のテーマも、また月の子ファンタージェン国におけるバスチアンの任務、すなわち、真の意志を探し出すという「おおいなる探索」のテーマも、アーサー王の伝説の中の三人の円卓の騎士に課された任務、すなわち、聖杯を探し出すという「おおいなる探索」のテーマと、規を一にしているのである。この意味では『はてしない物語』はアーサー王の伝説に範を取っている、ということも出来よう。そして、そのアーサー王の伝説の中でも、蛇または竜は複数登場してくるのである。しかし、それらの蛇はいずれも、この『はてしない物語』で、命の泉を守っている蛇とはずいぶん性格が異なっている。

また、南のおつけ所は、エジプトのルクソールにあるカルナック神殿を連想

させ、南のおつげ所のウユラは、カルナック神殿の本尊である太陽神ラーを連想させる。南のおつげ所の鍵なしの門の先にある巨大な柱の廊下は、カルナック神殿の大列柱廊を連想させもする。そのみならず、星僧院の三人の沈思黙考師の容姿は、古代エジプトの神々の姿とそっくりである。そのみか、「星僧院」で三人の沈思黙考師の求めに応じて、宇宙の究極の真理を彼らの目前に明示するためにバスチアンがとなえた「リハスト ラー」⁽⁸⁹⁾という呪文は、明らかに古代エジプトの最高神であるラーを意識したものであり、ラーに対する呼びかけを連想させる。ミヒャエル・エンデは古代エジプトの『死者の書』を知っていたにちがいない。ここで、古代エジプトの世界観の中での蛇を考えれば、この表紙に刻印されている蛇は、最高神ラーを具象化している太陽の外輪を形成している二匹の蛇である、とも言えるであろう。

その他、蛇が登場する神話や古代伝説は、世界中に多々あるのである。エンデが『はてしない物語』を書く時、エンデの念頭には複数の世界観が重層的に存在していたのであろう。それ故、この表紙の蛇をいずれか一つだけの既製の世界観に結びつけることは、おそらくエンデの意図に反することかもしれない。読者が自由に読みとればそれでいいのだ、とエンデは言うであろう。

最後に、本稿の主題であるこの物語のはてしなさについて結論を出しておかなければならない。この物語は、外界と内界との不可分の相互関係によって織りなされる世界の物語であった。その世界を楕円と称してきたわけである。この物語においては、楕円は一つではなかった。いくつもの楕円が成生・消滅をくり返してきたのである。ここで、この成生・消滅の仕方を説明しておかなければならない。

第1の楕円は、第2場、おさな心の君のファンタージェンの世界を外延として成立している。更に話が進んで、さすらい山の古老の登場によって、おさな心の君のファンタージェンの世界は、第1場をも併合するに到る。これと同時に、第1の楕円は第1場と不可分の関係に入る。それと同時に、この第1の楕円は楕円であることを解消して、第2の楕円の一つの中心へと進化し、第2の楕円の中へ統合されて行くのである。第1の楕円は消滅するとはいっても、第1の楕円の世界、すなわちおさな心の君の世界が消滅するわけではない。ただ楕円であることをやめて、その内容はいささかも損なわれることなく、第2の楕円の中へ統合されて行くのである。この消滅・成生運動は、第2場のおさな心の君のファンタージェンの世界を正とし、第1場のバスチアンの現実を反とし、この正と反を止揚して合として第2の楕円を成生して行く弁証法的運動と

してとらえることができる。

第4の楕円の成生過程も、これと全く同じである。まず、第3場月の子のファンタージェンの世界を外延として第3の楕円が成生する。話が第4場へと進んで行くと、第3場と第4場は不可分の関係の中に立ち、第3の楕円は楕円であることを解消して内界1極と変化する。この際も、第3の楕円は楕円であることを解消するとはいえ、その外延である月の子のファンタージェンの世界はいささかも損なわれることなく第4の楕円の中へ統合されて行くのである。この第4の楕円においては、第4場バスチアンの新現実世界が正、第3場月の子のファンタージェンの世界が反、そして第3場と第4場とを外延とする第4の楕円が合である。

第5の楕円の成生の機序も上と全く同じである。第4場のコレアンダー氏の証言によって、第2の楕円（これの外延は第1場と第2場）は、論理的にかつ客観的な事実として第4の楕円（これの外延は第3場と第4場）と不可分の関係の中に立たされるのである。これと同時に第2の楕円も第4の楕円も楕円であることを解消して、各々更に新しい第5の楕円の中心へと変化しつつ、各々の世界はいささかも損なわれることなく第5の楕円（これの外延は『はてしない物語』A本全部）の中へ統合されて行く。ここでは第4の楕円が正、第2の楕円が反、そして第5の楕円が合である。

従って、この『はてしない物語』のはてしなさの創造的持続性の本質は、内界と外界とが統合・止揚されて行く弁証法的無限運動である、と結論することができる。この本の表紙を飾っている刻印によるデザインは、すなわち三次元的構造のデザインはこの弁証法的無限運動を表現するための工夫だったのである。

『はてしない物語』（A本）の中には、この弁証法的無限運動を阻止せんとする配役も登場してきて、はてしない物語にスリルと意味深さを与えている。第2場のおさな心のファンタージェンの世界では、人狼アーガックスがこれである。アーガックスは死してなおかつアトレーユに咬みついて、アトレーユに死へ到る重傷を負わせている。第3場月の子のファンタージェンの世界では、女黒魔術師クサイーデがこれである。クサイーデは、バスチアンにファンタージェン国の帝王の座に即位する決心を固めさせることには成功したけれども、結局はクサイーデは間接的にはアトレーユに敗北して、直接的にはバスチアンが帝王になることを断念することによって自然消滅して行く。

こうして第5の楕円はいろいろな困難を排してなんとか成生したわけであるが、この第5の楕円といえどもけっして最後の楕円となるべきものではない。

これとても無限に続いて行くべき弁証法的運動の一過程で生じた泡のようなものである。物語の進展によってまた新たな世界と不可分な関係の中に立つ時、それと同時に、この第5の楕円も解消してその次の楕円の中へ止揚されて行く運命にあるのである。このことをエンデは、『はてしない物語』（A本）の最後という言葉によって示唆している。

「バスチアン・バルタザール・ブックス、」彼はつぶやいた。「もし私がまちがっていなければ、君はこれから多くの他の人々にファンタージェンへの道を教えてあげることだろう、その人が我々に生命の水を持ってきてくれるようにね。」

コレアンダーさんはまちがっていなかった。

でもこれはまた別な物語、これはまた別の時に語られることになるであろう。⁽⁹⁰⁾

こうしてファンタージェンの中へ行ってたくましく成長して現実界に帰ってきたバスチアンは、また新たな名前の新たなファンタージェンと不可分の関係を結んで、また新たな楕円を成生して行くのである。

なお、この物語全体にわたる5個の楕円の弁証法的成生関係をまとめると、次の通りである。

第2場：おさな心の君の世界＝第1楕円	→ 内界(正)	} 第2楕円(合)
第1場：バスチアンの昨日の現実世界	→ 外界(反)	

第4場：バスチアンの今日の現実世界	→ 外界(正)	} 第4楕円(合)
第3場：月の子の世界＝第3楕円	→ 内界(反)	

第4楕円	→ 外界(正)	} 第5楕円(合)
第2楕円	→ 内界(反)	

また、「これはまた別の物語」、以後の成生可能性として、

「何の某」のファンタージェン世界＝第6楕円	→ 内界(正)	} 第7楕円(合)
バスチアンの新現実世界／他の誰かの現実世界	→ 外界(反)	

以下、正反合による弁証法的生成を無限にくり返し続けて行く。これが『はてしない物語』のはてしなさの本質である。

注

- (1) Michael Ende: »Die unendliche Geschichte« Thienemann Verlag 1979 年 428 ページ
- (2) 同書 49 ページ
- (3) 同書 229 ページ
- (4) 同書 257 ページ
- (5) 同書 269 ページ
- (6) 同書 324 ～ 325 ページ
- (7) 同書 335 ページ
- (8) 同書 362 ページ
- (9) 同書 371 ページ
- (10) 同書 381 ～ 382 ページ
- (11) 同書 427 ～ 428 ページ
- (12) 子安美知子著『エンデと語る』(朝日選書 306) 朝日新聞社 130 ～ 132 ページ参照。
- (13) ルドルフ・シュタイナー著、高橋巖訳『色彩の本質』 1992 年第 5 刷 イザラ書房 51 ページ
- (14) 朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1989 年 4 月 14 日号 24 ページ
- (15) 朝日新聞社『朝日ジャーナル』 1989 年 4 月 21 日号 28 ページ。『はてしない物語』が初めて出版されたのは 1979 年であったから、この対談との間には約 10 年間の歳月がある。
なお、世界を明(光)と暗(闇)の二元論によって論ずる思想は、キリスト教よりも古いゾロアスター教に起源がある。
- (16) Michael Ende »MOMO« Thienemann Verlag 1993 年 159 ページ
- (17) 『エンデ全集 15 オリーブの森で語り合う』丘沢静也訳 岩波書店 1997 年 55 ページ
- (18) 同書 225 ページ
- (19) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemann Verlag 1979 年 7 ～ 8 ページ
- (20) 救世主イエス・キリストは新約聖書では「神の子羊」と称されることもある。

ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の子羊だ」と言った。(「聖書」新共同訳ヨハネによる福音書 1.

35 - 36)

また、「人の子」とも、神の「独り子」とも称される。

天から降ってきた者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。そして、モーゼが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。〔「聖書」新共同訳ヨハネによる福音書 3. 13 - 17〕

- (21) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemann Verlag 1979 年 419 ページ
- (22) 同書 420 ページ
- (23) 同書 19 ページ
- (24) 同書 25 ページ
- (25) 同書 25 ~ 26 ページ
- (26) 同書 26 ページ
- (27) 同書 36 ページ
- (28) 同書 37 ページ
- (29) 同書 34 ページ
- (30) 同書 49 ページ
- (31) 同書 70 ページ
- (32) 同書 94 ページ
- (33) 同書 99 ページ
- (34) 同書 111 ページ
- (35) 同書 160 ~ 161 ページ
- (36) 同書 169 ~ 170 ページ
- (37) 同書 185 ページ
- (38) 同書 185 ページ
- (39) 同書 186 ページ
- (40) 同書 187 ページ
- (41) 同書 187 ページ
- (42) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社 1986 年 51 ~ 52 ページ

(43) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemann Verlag 1979 年
193 ページ

- (44) 同書 197 ページ
- (45) 同書 198 ページ
- (46) 同書 200 ～ 201 ページ
- (47) 同書 211 ～ 212 ページ
- (48) 同書 222 ～ 223 ページ
- (49) 同書 228 ～ 229 ページ
- (50) 同書 256 ページ
- (51) 同書 275 ページ
- (52) 同書 280 ～ 281 ページ
- (53) 同書 289 ～ 290 ページ
- (54) 同書 301 ページ
- (55) 同書 304 ページ
- (56) 同書 317 ページ
- (57) 同書 326 ～ 327 ページ
- (58) 同書 328 ページ
- (59) 同書 332 ～ 335 ページ
- (60) 同書 346 ～ 347 ページ
- (61) 同書 347 ページ
- (62) 同書 350 ページ
- (63) 同書 355 ～ 357 ページ
- (64) 同書 369 ページ
- (65) 同書 377 ～ 378 ページ
- (66) 同書 383 ページ
- (67) 同書 392 ページ
- (68) 同書 394 ページ
- (69) 同書 395 ページ
- (70) 同書 401 ページ

(71) 田村都志夫編訳『ものがたりの余白ーエンデが最後に話したこと』（岩波書店 2000 年）の中で、エンデは夢について次のように言っている。

エンデ 夢とは…、実は内なる価値体系全体の隠喩なのです。生きることそのものにおいて意味を与えてくれるもの。(248 ページ)

これはエンデが構想していた長編童話『夢どろぼう』という本に関連しての話ではあるけれども、この夢の定義は『はてしない物語』のこの箇所でもあてはまるであろう。

- (72) 同書 402 ページ
- (73) 同書 414 ページ
- (74) 同書 416 ページ
- (75) 同書 418 ～ 419 ページ
- (76) 同書 34 ～ 35 ページ
- (77) 同書 421 ～ 422 ページ
- (78) 同書 423 ページ
- (79) 同書 424 ページ
- (80) 同書 146 ～ 147 ページ
- (81) 同書 168 ページ
- (82) 同書 419 ～ 420 ページ
- (83) 同書 424 ～ 425 ページ
- (84) 同書 426 ページ
- (85) 同書 190 ページ
- (86) 同書 419 ページ
- (87) 同書 426 ページ
- (88) 同書 386 ページ
- (89) 同書 334 ページ
- (90) 同書 428 ページ